ヌルデ

課題フォルダ

一〇月～一二月

小６までの課題フォルダには、暗唱検定用の暗唱長文の３ページのうち１ページだけを末尾に載せています。その先の暗唱長文は、ウェブでごらんください。
https://www.mori7.com/mine/as2.php

●言葉の森 233-0015 横浜市港南区日限山4-4-9 電話 045-353-9061

教材の説明

▼作文ノート

2023年7月より、作文用紙と封筒用紙は、お送りしなくなりました。
作文については、市販の作文ノート120字詰、150字詰、200字詰などを各自でご用意ください。
作文は、写真で画像を撮り、作文の丘から送ることができます。
作文を郵送される方は、封筒を各自でご用意ください。

▼再発行料金

課題フォルダやシールの再発行を希望される場合の料金は、次のとおりです。
課題フォルダ：550円　住所シール：165円
課題フォルダはホームページでもごらんになれます。項目や住所の記載は、手書きでもかまいません。
各種用紙類は、学習の手引にＰＤＦファイルとして載せていますので、それを印刷して使っていただいても結構です。
https://www.mori7.com/mori/gate.php
課題フォルダは、ウェブページから印刷することもできます。
https://www.mori7.com/mine/kd.php

▼欠席や電話先変更をする場合は

欠席や電話先変更をする場合は、ホームページからご連絡ください。担当の先生のメールに直接連絡が行きます。
しかし、この連絡メールには返信はありませんので、時間の変更依頼などの連絡は行わないようにしてください。
https://www.mori7.com/outi/d/
ユーザー名、パスワード、生徒コード（生徒コードはユーザー名と同じ。いずれも半角英数字）を入れて、「先生への欠席等連絡」というリンク先をクリックします。

オンラインクラス一覧表のご自分のコードの横にある（三角印）から欠席連絡をすることもできます。
欠席や電話先変更の連絡はお電話でも受け付けています。電話045-353-9061（平日10:00〜17:00　土日10:00〜12:00）

課題集 ヌルデ の山

長文集 ◆横書き長文全文 ▲縦書き長文全文

★印がその週の主な課題です。（感）は感想文の課題です。
「絵 池 渚 波」はインターネットのリンク先です。ヒントなどにリンクしています。<http://www.mori7.com/mine/iwa.php>
◆▲をクリックすると長文だけを表示します。◆横書きルビ付き△縦書きルビなし▲縦書きルビ付き

週	課題	週	課題
10.1週 絵 池 渚 波	○自由な題名 ◎はじめてできたこと ★私の好きな遊び、お父(母)さんの仕事 笑いながら食べるごはん ◆ △ ▲	**11.3週** 絵 池 渚 波	○自由な題名 ○寒い日や雨の日 ★科学的態度（感） ◆ △ ▲
10.2週 絵 池 渚 波	○自由な題名 ○木登（きのぼ）りをしたこと ○将来なりたいもの、ゆるしてあげたこと ★子どものころ、わたしは（感） ◆ △ ▲	**11.4週** 絵 池 渚 波	◎自由な題名 ★清書（せいしょ） ○初七日の終わった夜、 ◆ △ ▲
10.3週 絵 池 渚 波	○自由な題名 ○野山に出かけたこと ★あなたがたはとくと（感） ◆ △ ▲	**12.1週** 絵 池 渚 波	○自由な題名 ◎小さいころから大切にしているもの ★おいしかったことまずかったこと ついにできたブリッジ ◆ △ ▲
10.4週 絵 池 渚 波	◎自由な題名 ★清書（せいしょ） ○はじかれたように、 ◆ △ ▲	**12.2週** 絵 池 渚 波	○自由な題名 ○うれしかったことや悲しかったこと ○わたしのしているスポーツ ★ある日、五つになる（感） ◆ △ ▲
11.1週 絵 池 渚 波	○自由な題名 ◎いたずらをしたこと ★木登りをしたこと、わたしの好きな食べ物 音のする重いカメラ ◆ △ ▲	**12.3週** 絵 池 渚 波	○自由な題名 ○もうすぐクリスマス（お正月） ★数年前のことに（感） ◆ △ ▲
11.2週 絵 池 渚 波	○自由な題名 ○お父さんやお母さんと遊んだこと ○私の好きな日、バスや電車に乗ったこと ★これまでの人の観察や（感） ◆ △ ▲	**12.4週** 絵 池 渚 波	◎自由な題名 ★清書（せいしょ） ○いちばん運動会らしいのは、 ◆ △ ▲

項目表 ヌルデの苗

目標：表現をくふうし構成を意識して書く

★重要・評価あり　◎重要・評価なし　○普通・評価なし　段落は大体の目安です。

第１段落	項目	キーワード	説明
構成	○ 題名の工夫	題名の工夫　<<構成>>	「○○な○○」「○○の○○」のように工夫
構成	◎ 中心を決める	いちばん　中心　一番　<<構成>>	いちばん……なのは
構成 【 】	★ 要約／感想文	要約　<<構成>>	要約を２００字ぐらいでまとめる
構成	◎ 書き出しの工夫／作文	書き出しの工夫　<<構成>>	会話・色・音・情景で書き出す

↓

第２段落	項目	キーワード	説明
題材	◎ 体験実例	体験　私　わたし　僕　ぼく　<<題材>>	自分らしい体験実例を書く
表現 【 】	★ たとえ	まるで　みたい　よう　<<表現>>	まるで…のよう
題材	○ その人らしい会話	「　」　<<題材>>	人柄や気持ちがあらわれている会話
主題	○ たぶん	たぶん　多分　<<主題>>	ほかの人の気持ちを推測する

↓

第３段落	項目	キーワード	説明
題材 【 】	★ 前の話聞いた話	前　聞　調べ　<<題材>>	前の話、聞いた話、調べた話
表現	○ いろいろな思った	いろいろな思った　<<表現>>	だろう。かもしれない。と言いたい。
表現	◎ ダジャレ表現	ダジャレ　だじゃれ　駄洒落　<<表現>>	思ったことなどの中にダジャレを使う
表現	○ 現在形		ところどころに説明や描写を入れる

↓

第４段落	項目	キーワード	説明
表現 【 】	★ ことわざの引用	ことわざ　言葉　諺　<<表現>>	主題につながることわざを引用する
主題 【 】	★ わかったこと	分かった　わかった　<<主題>>	理解したこと学んだこと発見したこと
構成 【 】	★ 書き出しの結び／作文	書き出しの結び　<<構成>>	書き出しのキーワードを使って結ぶ
表現	○ 絵をかく		そのときのようすを絵でかく

字数	★ ８００字以上	
表記	○ 決めてくる、読みかえす	書くことを決めてくる、書いたあと読み返す
表記	○ 短い会話少なく	会話はその人らしさが出ているものを
表記	○ 構成メモ	作文を書く前に構成メモを書く
表記	★ 漢字を使う、ていねいに書く	習った漢字を使いていねいに書く
表記	○ 段落三文	段落の目安は三文ぐらい
表記	○ 一文一点	読点は１文に１～２点を目安に
表記	★ 常体で書く	した・だった・であるなどで書く練習
表記	○ 一文百字以内	一つの文が百字をこえないように

笑いながら食べるごはん

長文 10.1週 nu

1「泣きながらごはん食べると、おいしくない」。小さいとき、どこかでそんな歌を聞いた。

歌の内容は、もうすっかり忘れてしまったのだが、そのワンフレーズだけはよく覚えている。きっとその当時から、「それはそうだなあ」と実感し、納得していたのだろう。

2両親にしかられたり、友達とけんかをしたり、先生にお説教をされたりしたあとに食べるご飯は、確かにおいしくない。悲しいとかくやしいとか、そんな重苦しいものがお腹にズウンとつまっているようで、食欲すらわいてこないこともある。

3もしかしたら、どんなに嫌な気分でいても、ご飯を食べているうちに忘れていって、満腹になったらケロッとしてしまう明るい性格の人もいるのかもしれないが、大多数の人はそうではないだろう。4つまり「おいしい」とか「まずい」というのは、食べ物そのものより、自分の心の持ちようで変わるものなのかもしれない。

そういえば、こんなこともあった。前、沖縄へ旅行をして、海辺でゴーヤチャンプルーを食べたときのことだ。5新鮮な感じがして、とてもおいしかった。それをもう一度味わいたくて、帰ってから母にゴーヤチャンプルーを作ってほしいと頼んだ。

しかし、いざそれが我が家の食卓に乗り、一口食べてみたら、なぜかそれほどおいしくは感じられなかった。6いや、はっきり言うと変な味だと思ってしまった。

せっかく作ってくれた母に悪かったので、全部食べたが、「こんな味だったっけ？」と首をかしげたくなったものだ。

7今思うと、沖縄の海で思いきり泳ぎ、お腹を空かせて、美しい海を眺めながら食べた、という雰囲気が、おいしさを倍増させたのだろう。

やはり、よい気分で食べるご飯はおいしい。楽しい気持ちでいると、不思議とお腹も空く。

8この間の給食のとき、友達が面白い話を連発して、大笑いをした。まるでお腹がよじれるようで、絶対に吹き出してしまうから、牛乳を飲むことができなかったほどだ。

ただし、そのとき食べたものの肝心の味がどうだったかということは、実はあまり覚えていない。9というより、友達とのおしゃべりが面白すぎて、何を食べたかも思い出せないのである。

「笑いながらごはん食べても、おいしいとは限らない」。ふと、そんな言葉が頭に浮かんだ。でも、笑いながらごはんを食べれば、お腹も心も満腹になる。これからも、そんな楽しい食事をしていきたい。0

（言葉の森長文作成委員会　こ）

課題 ヌルデ 10.1週
★私の好きな遊び、お父(母)さんの仕事
今週は題名だけの課題です。
解説 10.1週

今の好きな遊びと、昔好きだった遊びを比較して、両方に共通するものを見つけて感想を書いてみましょう。「遊びというのは……とわかった」というかたちでうまくまとめられるかな。

解説のつづき 10.1週

全体を四つぐらいの段落に分けます。

第一段落は、好きな遊びの説明です。常体で書くので、「ぼくの好きな遊びは〇〇だ。」と書いていきます。そのまま、その遊びの説明やいつごろから流行っているかなど、説明を追加していきます。

第二段落で、その遊びにまつわる出来事を書いていきます。「この前、こんなことがあった。」というかたちです。この出来事の中にたとえなどを入れて、長くくわしく書いていきます。

第三段落は、「前の話、聞いた話」です。「お父さんに子供のころの遊びを聞いてみた。すると……」という書き方です。お父さんは、子供のころいたずらをしていることが多いので（笑）、この第三段落が面白く書ける場合がよくあります。

第四段落は、「分かったこと」です。「遊びというのは、無駄なように見えるけれど、その中でいろいろなものを学ぶことができるものだ。」のように大きく書いていくといいです。５年生以上の生徒は、こういう大きい話を理解する力があります。

解説のつづき 10.1週

「私の好きな遊び」ことわざの引用例

【１】『類は友を呼ぶ』→ゲーム好きなお友達が集まって、夢中で楽しんでいるようすを書くときなどに使えそうですね。

【２】『もちは餅屋』、または『蛇の道はへび」→仲間と遊ぶとき、必ずといってよいほど、その道の専門家のように、遊びに精通している人がいるものです。そんなありさまを描写するときに効果的です。

【3】「例外のない規則はない」→おにごっこやドロけいをするときなど、いつものルールをひとくふうして、遊んだときに、このことわざが使えますね。

ゲームの裏技を楽しむときにも、引用してみてください

解説のつづき 10.1週

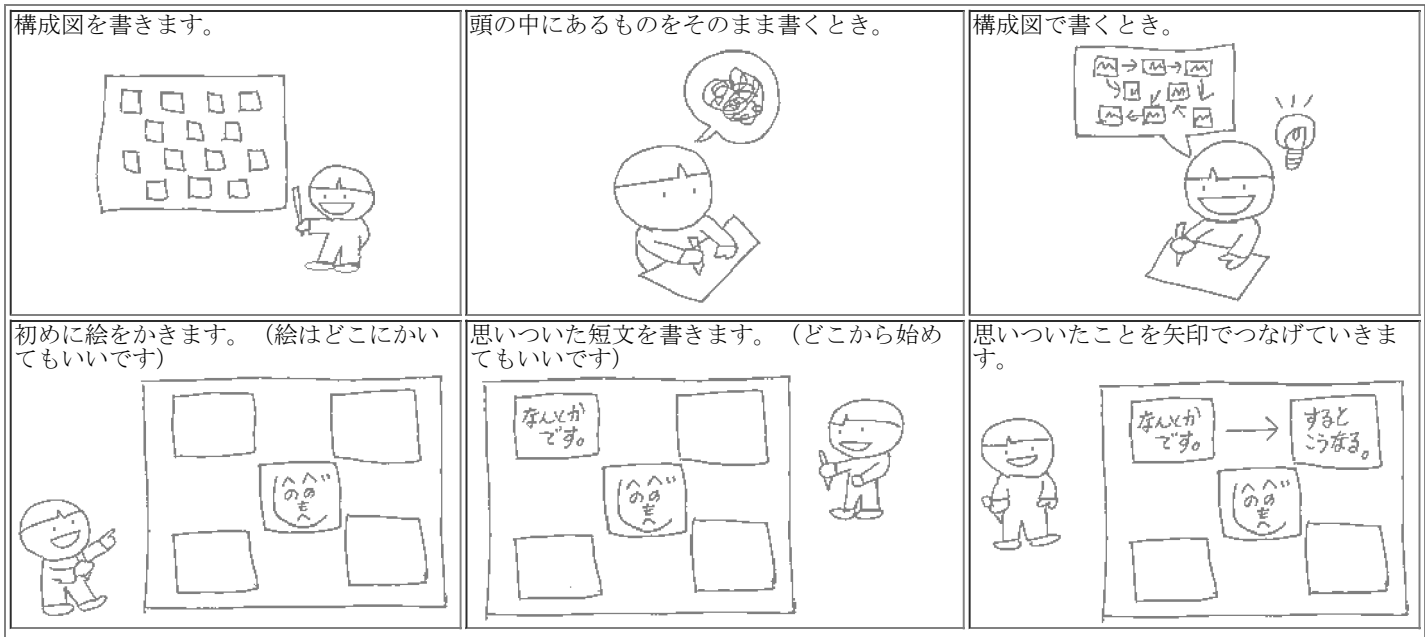
構成図は、小３以上の生徒が書きます。小２以下の生徒は、絵をかいてから作文を始めるという課題になっているので、構成図は書かなくて結構です。

構成図を書くときに大事なことは、思いついたことを自由にどんどん書くことです。テーマからはずれていても、あまり重要でないことでも一向にかまいません。

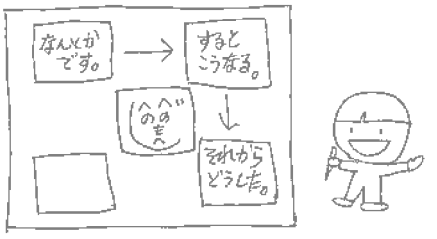
たくさん書くことによって、考えが深まっていきます。したがって、構成図は、できるだけ枠（わく）を全部うめるようにしてください。しかし、全部埋まらなくてもかまいません。

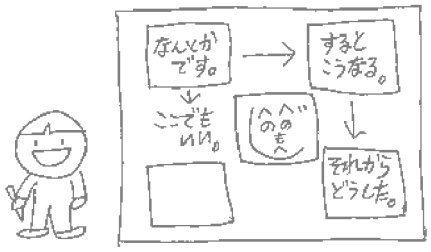
枠と枠の間は→などで結びます。この矢印は、書いた順序があとからわかるようにするためです。作文に書く順序ということではありません。

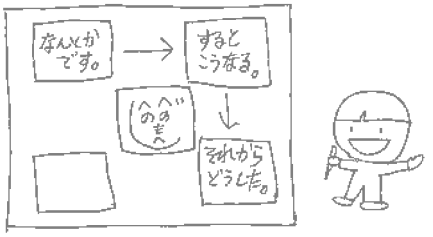
構成図は、原稿用紙や普通の白紙に書いて結構です。

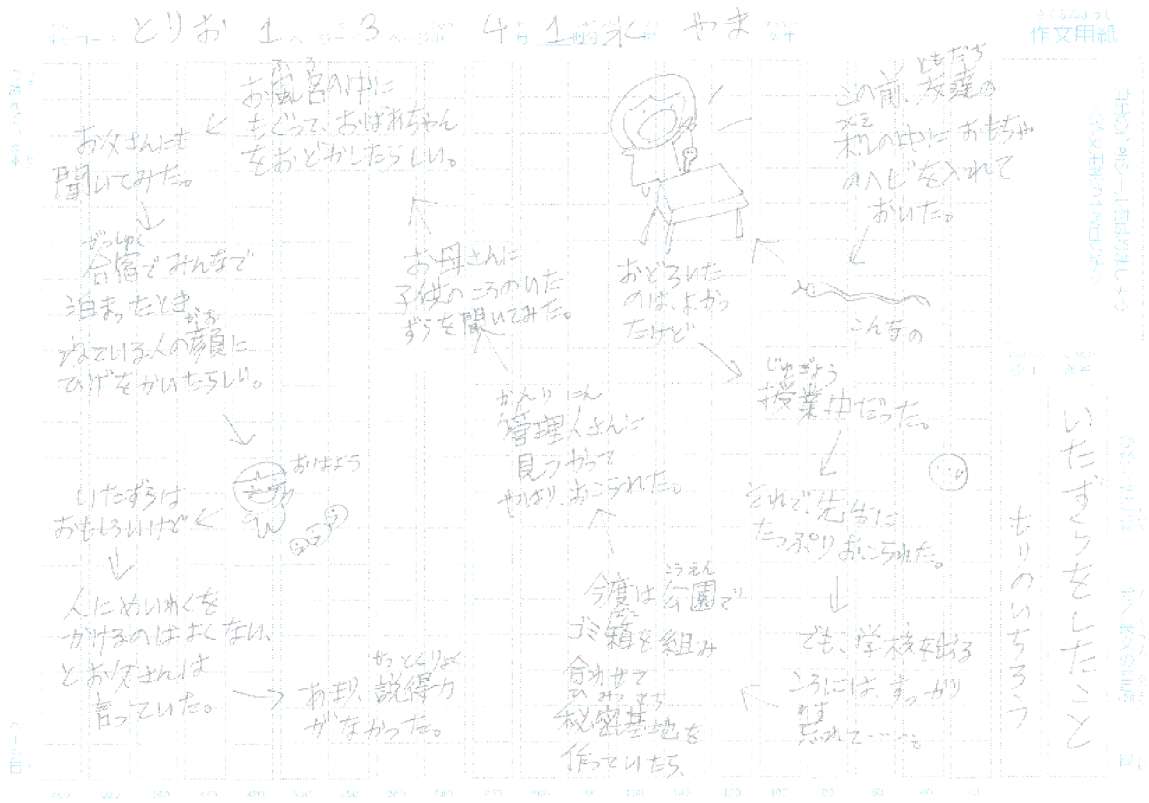


関係なさそうなことでも自由にどんどん書きます。	はみだしてもかまいません。	大体うまったらできあがり。

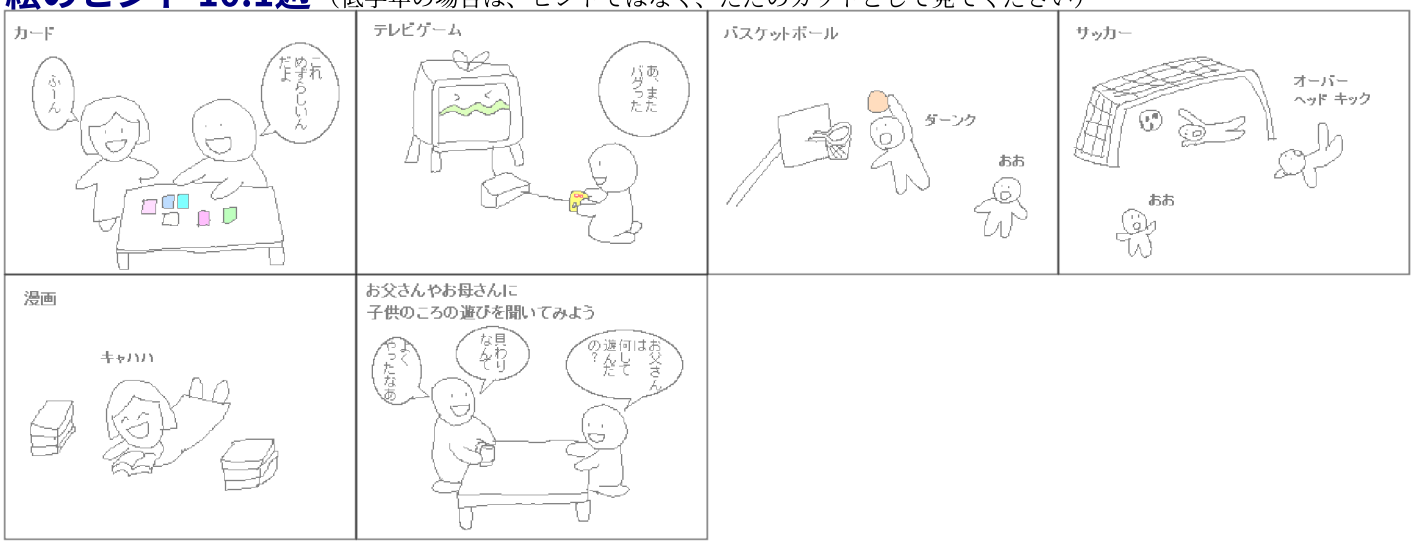








絵のヒント 10.1週 （低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください）



★子どものころ、わたしは（感）

長文 10.2週 nu

1 子どものころ、わたしは「ノーの一語」という見出しの文を読んだことがある。それは、あるイギリス人の書いた本から訳したものだということで、「ノー」ということばは、ときとしてたいへん言いにくいことばであるが、言いにくいからといって、言うべきときに、言わないでいると、相手に思いもよらない迷惑をかけることがある、というものであった。2 これは、おそらく、人間という人間が、生きていくあいだにいくどとなくぶつかる問題であると思う。わたしもこの問題について考えてきたことを書いてみたい。

ことばの生活には、ときどき、言いにくいことばがあらわれて、わたしたちのことばを、にごらせたり、くもらせたり、ゆがませたりする。

3 「忘れました。」もそのひとつである。このことばを言うとき、知らないあいだに、わたしたちの声は小さくなったり、不明確になったりしやすい。ことに、忘れてはならないだいじな用事を忘れたときなど、「忘れました。」は、いっそう言いにくいことばになって、なぜ忘れたかという言いわけのほうが、それよりもさきに口をついて出てくる。4 しかし、そういう言いわけは、じっさいには責任転嫁にきこえるだけで、なんのききめもない。「忘れました。すみません。」という、責任感から出たことばだけが、相手の心をほぐす力がある。それを言ったあとで、忘れるようになった事情をのべれば、それは責任のがれではなく誠意のこもったことばとして、相手の心に通じるものである。

5 一般に、「ください。」とか「おねがいいたします。」とかいう依頼のことばや、「すみません。」とか「ゆるしてください。」というようなわびのことばも、言いにくいものである。6 ことに、まだことばの生活にじゅうぶんなれていない少年や青年のころには言いにくい。そのために、つい、言うのをためらったり、ことばをあいまいにしたりして、卑屈な態度になりやすい。7 あるいはまた、まともに「申しわけありません。」と言うかわりに、「おわびに来ました。」というような言い方になりやすい。それではおわびの真実はあらわれない。言いにくさを押しきって言う声やすがたこそ、おわびの真実があらわれて、相手の心を動かすのである。

8 そのようにだいじな、しかも、ことばとしてみればほんのかんたんなひとことが、どうしてそんなに言いにくいのであろうか。それは、こういうことばは、自分の失敗や、欠点や、無力さを、みずからみとめる自己否定のことばだからである。

9 しかし、自分を否定するとは、自分の全体をだめだとしてしまうことではない。

自分のここがまちがっていたとか、この点がたりなかったのだとか、自分からはっきりみとめてそれを否定することであり、そうすることで、わたしたちは明るくなり、つよくなる。0 とはいっても、自分の全部を肯定して、自分だけは完全なもののように思っていたいのが人情である。だから、だれでも、自分の欠点をみとめたり、みとめられたりすることは、本能的にさけようとするのである。

こういう類の言いにくいことばをほんとうに征服することができたとき、人間としての真実が開けてくる。また、人間としての真実があらわれるとき、言いにくいことばも征服される。そういう真実になってものを言うとき、そのことばはよく相手に通じるだけでなく、ことばのひびきもすがたもすっきりしてくるのである。

課題 ヌルデ 10.2週
★子どものころ、わたしは（感）
今週は感想文の課題です。
解説 10.2週

解説：友達に何かをたのまれてことわれなかったり、いやなことをイヤと言えなかったり、あやまりたいけどあやまれなかったりしたことってあるでしょう。「ごめんね」ということばは、なかなか言いにくいものです。５年生は、この文章を読んで「わかったこと」を書きましょう。「人間は……」「言葉というものは……」という大きい感想でわかったことを書いていくとなおいい感想になります。

ことわざ：「知って行わざるは、知らざるに同じ」「人生意気に感ず」「実るほど頭（こうべ）をたれる稲穂かな」などが使えそうです。

解説のつづき 10.2週

第一段落は要約です。長文の中から大事なところを三つか四つ選び、自然につながるように文を組み立てて書いてください。

第二段落は、似た例です。　忘れ物をしたり、失敗したとき、自分はどんな行動に出たのか、そのときの心の動きや体験を、思い出して書いてみましょう。

第三段落も、また、似た例です。いたずら心でお父さんの大切にしている桜の木を切ってとがめられたとき、正直に「ぼくがやりました。」と謝罪して、その勇気をほめられたという、アメリカ大統領、ジョージワシントンの伝記の一節なども使えそうですね。

第四段落は、「わかった」ということばを使って意見をしめくくりましょう。言いにくい言葉でも、勇気をだして、きっぱり口に出して自分の意志を相手に伝えること、自らの欠点や落ち度を自分からはっきり認めることの大切さや、本能的にそれを避けようとする心を否定することによって、わたしたちは明るくなり、強くもなれる……という意味合いでまとめてください。

絵のヒント 10.2週（低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください）

★あなたがたはとくと（感）

長文 10.3週 nu

1あなたがたはとくと考えたことがあるでしょうか、今も日本がすばらしい手仕事の国であることを。西洋では機械の働きがあまりにさかんで、手仕事の方はおとろえてしまいました。しかし、それにあまりかたよりすぎてはいろいろの害が現れます。2だから、各国とも手の技をもり返そうと努めています。なぜ機械仕事とともに手仕事が必要なのでしょうか。機械によらなければできない品物があるとともに、機械では生まれないものがかずかずあるわけです。3すべてを機械に任せてしまうと、第一に国民的な特色あるものがとぼしくなってきます。機械は世界のものを共通にしてしまうかたむきがあります。それは、残念なことに、機械はとかく利得のために用いられるので、できる品物がそまつになりがちです。4それに人間が機械に使われてしまうためか、働く人からとかくよろこびをうばってしまいます。こういうことがわざわいして、機械製品にはよいものが少なくなってきました。これらの欠点を補うためには、どうしても手仕事が守られねばなりません。5そのすぐれた点は多くの場合民俗的な特色がこく現れてくることと、品物がてがたく親切に作られることです。そこには自由と責任とが保たれます。そのため仕事によろこびがともなったり、また新しいものをつくる力が現れたりします。6だから手仕事をもっとも人間的な仕事と見てよいでしょう。ここにそのもっとも大きな特性があると思われます。

かりにこういう人間的な働きがなくなったら、この世に美しいものは、どんなに少なくなってくるでしょう。7各国で機械の発達をはかるとともに手仕事を大切にするのは当然な理由があるといわねばなりません。西洋では「手で作ったもの」というとただちに「よい品」を意味するようにさえなってきました。人間の手には信らいすべき性質が宿ります。

8欧米の事情にくらべますと、日本ははるかにまだ手仕事に恵まれた国なのに気づきます。各地方にはそれぞれ特色のある品物が今も手で作られつつあります。たとえば手漉きの紙や、手轆轤の焼き物などが、日本ほど今もさかんに作り続けられている国は、ほかにはまれではないかと思われます。

9しかし、残念なことに日本では、かえってそういう手の技が大切なものだという反省がゆき渡っていません。それどころか手仕事などは時代にとり残されたものだという考えが強まってきました。そのため多くは投げやりにしてあります。0このままですと手仕事はだんだんおとろえて機械生産のみさかんになるときがくるでしょう。しかし、私どもは西洋でなした過失をくり返したくありません。日本の固有な美しさを守るために手仕事の歴史をさらに育てるべきだと思います。

さて、興味深いことには、ほうぼうでめぐり合った手仕事による品物は、それがどんなに美しい場合でも、一つとして作った人の名をしるしたものはありません。時として何地方名産とか、何何堂製などとはり紙のついている場合もありますが、個人の名はどこにもしるしてありません。ところが近世の「美術品」と呼ばれているものを見ますと、どこにもみな銘が書き入れてあります。または落款がおしてあります。銘というのは作り手の名であり、落款というのはその名をしるした印形です。たとえばどんなつまらない作品にも何某の作ということがしるしてあります。

ここにおもしろい対比が見られます。一方では名などしるす気持ちがなく、一方は名を書くのを忘れたことがありません。なぜこんな相違が起こるのでしょうか。要するに一方は職人が作るものであり、一方は美術家が生むものだからであるといわれます。前者は多くの人たちの作りうるものであり、後者はある個人だけが作りうる作品だからです。しかしこのことは、とかく前者をいやしみ、後者をのみ尊ぶ風習を生みました。なぜなら職人の作ったものは平凡であり、美術家の作るものは非凡であると思われるからです。どんな品物も銘がない場合に、その市価が落ちるのはつねに見られる現象です。ですがこういう見方ははたして当をえたものでしょうか。（中略）

じつに多くの職人たちはその名をとどめずにこの世を去っていきます。しかし、かれらが親切にこしらえた品物のなかに、かれらがこの世に生きていた意味が宿ります。かれらは品物で勝負しているのです。物で残ろうとするので、名で残ろうとするのではありません。

課題 ヌルデ 10.3週
★あなたがたはとくと（感）

今週は感想文の課題です。

解説 10.3週

機械でなんでも作れる世の中になってきましたが、それだけに手仕事で作られたもののよさが見直されているようです。みなさんの中にも、教室に持ってくるバッグをお母さんが作ってくれたという人がいるでしょう。もし、芸術家がバッグを作るとしたら、そこに自分の名前を入れて、「これはピカソが作ったバッグだ」などと主張するかもしれません。しかし、お母さんはそんなことをしません。名前を残そうとするよりも、子供が喜ぶようなバッグを作ろうとするところに心が向いているからです。

手仕事のよさということで似た話を考えてみましょう。手編みのセーター、手書きの年賀状、手作りのお弁当など、いろいろありそうですね。

ことわざのヒントは、逆の意味で「餅（もち）は餅屋」。芸術作品や値段の高いものだけが尊いのではないという意味で「山高きが故に貴からず」。だれかにほめてもらうことよりも、いい品物を作ることに心をこめるという意味で「人を相手にせず、天を相手にせよ」などが使えそうです。

解説のつづき 10.3週

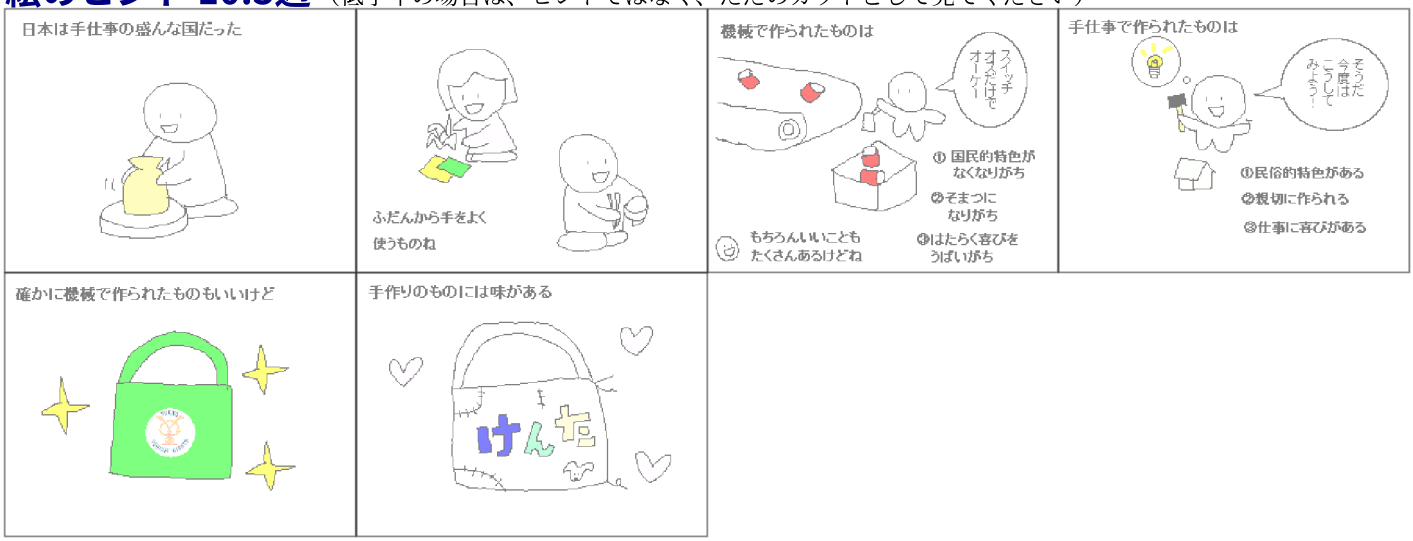
第一段落は要約です。要約は、三文抜き書きと同じようなものと考えておけばいいです。長文の中から大事なところを三つか四つ選び、それらがうまくつながるように文を直して書いていきましょう。

第二段落は、似た例です。日本人は手仕事が得意ということで、書いていきましょう。「私も、折り紙で鶴を作れる」というような話でもいいですし、「母はよく私にバッグなどを作ってくれる」という話でもいいです。

第三段落も、似た例です。機械で作ったものは便利だが味がないというような例でもいいでしょう。例えば、「この前、お店で買ったバッグは格好よかったけど、お母さんが作ったバッグの方が僕は好きだ」というような例です。このほかに、夏休みの工作で自分が作ったものは愛着があるというような話でもいいです。また、お母さんやお父さんに聞いて、昔はどういう手作りをしていたのかを取材してみます。お父さんによっては、「昔は、鉛筆削りがなくてナイフで……」などと話してくれるでしょう。

第四段落は、「わかった」ということばでまとめの感想です。「日本人は手作りが得意だということがわかった」というような書き方です。「書き出しの結び」で、書き出しのキーワードを入れてまとめてもいいですが、作文の週の「書き出しの工夫」に対応させて練習した方がわかりやすいので、感想文の課題のときは、特に「書き出しの結び」をしなくてもいいです。

絵のヒント 10.3週（低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください）



○はじかれたように、

長文 10.4週 nu

はじかれたように、ぼくはふすまに手をかけた。一気にひきあけると、廊下にとびだした。

でも、やっぱりそこには、だれもいないのだ。それなのに、だれもいない廊下を、小さな足音だけが、ゆっくりと遠ざかっていく。

ぼくの体の中に、大きな恐怖がふくれあがってきた。その恐怖が、悲鳴になって口からあふれでそうになったとき、表座敷に通じる廊下の角を曲がって、ひょいと、いとこの昌一が姿をあらわした。

「よお。しげちゃん。」

もし、昌一のそういう声をきかなかったら、まちがいなくぼくは叫んでいただろう。だって、中学生の昌一の頭は坊主刈りで、おまけにその日昌一は、中学校の制服の白い開襟シャツと黒い学生ズボンをはいていたものだから、ぼくにはまるで、さっきの男の子が急に大きくなって、またそこにあらわれたような気がしたのだ。

「よお。」

立ちすくむぼくに向かってもう一度声をかけながら、昌一が近づいてきた。いつも無愛想な顔にせいいっぱい愛想のいい、照れたような笑いを浮かべている。

「昌……ちゃん。」

ぼくは、かすれたような声で、いとこの名を呼んだ。

「い……今、だれかと、すれちがわなかった？　小さい……坊主頭の男の子と……。」

昌一は、ぎょっとしたようにうしろをふりむき、それから、きょろきょろとあたりをみまわし、ちょっと肩をすくめてみせた。

「いいや。だれとも……。なんや？　それ。」

ぼくの全身に、どっと冷たい汗がふきだした。あの子は、この暗い廊下から、あとかたもなく消えうせてしまったのだ。

それが、ぼくがぼっこにであった最初だった。

ぼくは今でも、あの夜のことを思いだす。裏庭の闇の中で降るように花を散らしていた桜を。長い廊下の天井で、頼りなくゆれていた電灯を。ぼくと昌一の間を埋めていた、あのなつかしいおばあちゃんの家のにおいを……。

でも、そのときにはぼくはまだ、自分が本当にこの家で暮らすことになるなんて思ってもいなかった。いつかまた、ぼっことであう日がくるとは考えもしなかった。

それなのに、あのぼんやりとした春の夜、ぼくのまわりではもう、新しいなにかがうごきだそうとしていたのだ。

（富安陽子「ぼっこ」）

課題 ヌルデ 10.4週　★清書（せいしょ）

４週目は清書です。

音のする重いカメラ

長文 11.1週 nu

1 バッシャン。シャッターを押すと、そんな音がするカメラがあるなんて信じられるだろうか？

今や、カメラといえばみなデジカメである。シャッター音といえば、「ピピピ」、「ピロリロ」、「シャラーン」などという、電子的でオシャレなものを思い出すだろう。

2 中には気を利かせて、「カシャッ」という機械音を再現してくれるものもあるが、それでもてのひらに、シャッターが動いた振動まで伝わってくることはない。

一つ一つの部品を、すべて人の手で組み上げたカメラ。3 鉄製の機械じかけのカメラ。そういう古いカメラは、シャッターを切るときに、確かな音と手ごたえがあるのだ。

私がそのカメラを手にしたきっかけは、ある日の先生の一言だった。

4 「今度の校外学習では、みんなで写真を撮りにいきます。ただし、デジカメや携帯ではいけません」

私たちは、はじめ、何を言われたのかよく分からなかった。みんながぽかんとしていると、先生はこう続けた。

5 「フィルム式の古いカメラが、必ず家にあるはずです。ご両親に聞いてみてください。分からなかったら、おじいさんやおばあさんに確認してもらってください」

そんなものあるわけない、と思った。家族旅行に行くときも、いつも写真はデジカメで撮っている。6 そんな骨董品のようなもの、私は見たことがなかった。

しかし意外なことに、そんな「見たこともない古いカメラ」は、私の家にあったのだ。

話をしたら、父はあっさりとそれを出してきてくれた。おじいちゃんの家からもらってきたものだという。7 先生の言葉は的中していたわけだ。

私はそのカメラを首から下げて、撮影の練習をしてみた。これが本当にカメラかと思うほど、ズシリと重い。しかもそれを構えたまま、いろいろな操作を手動でしなければならないらしい。8 完全オートが常識の私にとって、何もかも信じられないことだった。

そして校外学習の当日、私はさらに驚かされた。私の家が特別なのかと思いきや、クラスのほとんど全員が、同じような古めかしい、重そうなカメラを持ってきていたのである。9 ずらりと並んだカメラを見て、先生は満足そうに笑っていた。

しかし、そんな先生が突然、ある友達の机を見て大声を上げた。

「それをそんなふうに置いちゃだめ！」

なんと、その友達が持ってきたカメラは、一台十万円もする、たいへん歴史ある高級なカメラだったのだ。

0 それを聞いた私たちは度肝を抜かれて、では自分のカメラはどのくらいの価値なのかと、先生を質問ぜめにすることになった。

私のカメラは、とくべつ高級品ではなかったようだ。だが、このとき私はすでに、このカメラのことがかなり気に入っていた。なぜなら、このカメラを使えば、なんだかいつもより自分らしい写真が撮れるような気がしていたからだ。

「バッシャン」という音を聞くのが、私は楽しみになっていた。同時に、このカメラを家族が大事に残していた理由が、少し分かった気がした。

校外学習は、街の歴史探検だった。重いカメラをそれぞれに首から下げて、私たちは、胸を張って校外学習に出発した。

（言葉の森長文作成委員会　ｃ）

課題 ヌルデ 11.1週
★木登りをしたこと、わたしの好きな食べ物
今週は題名だけの課題です。
解説 11.1週

もう木登りをする年齢ではないかもしれませんが、小さいころ、木に登ったことを思い出して書いてみましょう。そういう話がないという人は、自由な題名で。

結びは、木登りについてわかったことを。「やっぱり人間は昔サルだったのだとわかった」という人もいるかな。

解説のつづき 11.1週

第一段落は、書き出しの工夫と説明。「『わあ、高い。』私は思わず心の中でさけびました。この前、公園のクスの木に登ってみたのです。その木は……」

第二段落は、続けて、その木登りの出来事。たとえを入れる。

第三段落は、お父さんやお母さんに聞いた話。「私は、父に木登りの話を聞いてみました。父は、子供のころ、木から落ちたことがあるそうです。」

第四段落は、分かったこと。「私は、お父さんの祖先はやはりサルだったのだとわかった。（笑）」あるいは、「木登りにもコツがあるのだとわかった。」「だれでも、一度は木登りをしてみたくなるときがあるのだとわかった。」などなど。

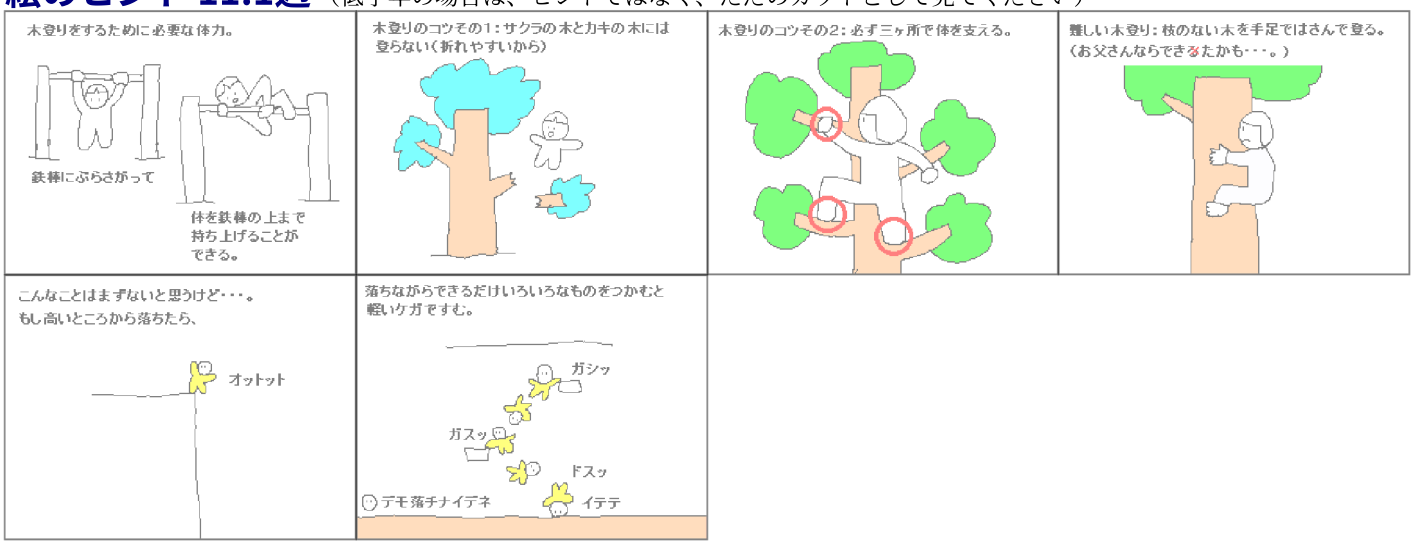
解説のつづき 11.1週

木登りは本当に楽しいですよね。苦労して、のぼりきって、太い枝に腰かけて下を見下ろしたら、普段（ふだん）見慣れている地面のようすが一変して、別の世界のように感じられ、胸がスカッとするものです。

でも、木登りなどの、思い出話がないという人でも、校庭にある【上り棒】（のぼりぼう）や公園の【ジャングルジム】、またアスレチックで遊んだことは、1〜2回くらいなら、きっとあるはずでしょう。そういう体験をふまえて、作文を書き進めていき、結びで自然木の木肌に触れて遊ぶことの意義や楽しさが、どんなに大切かというのがよく分かった……というふうにまとめてみるといいです。

また、高い樹木（じゅもく）にのぼって枝打ちをしたり、森林の管理などに携わる（たずさわる）営林業の人たちの労苦や生きがいなどに思いをめぐらせて書いてみるのも、良い試みのひとつでしょう。

絵のヒント 11.1週（低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください）



★これまでの人の観察や（感）

長文 11.2週 nu

1 これまでの人の観察や考えを利用するという必要から、読書はまず必要である。現在の学問にとっても必要である。いな、学問がだんだん進歩して、人間のありさまについても、自然のありさまについても、観察や思想が積み重なれば重なるほど、たくさんの本を読むことが必要になってくる。2 昆虫の生活を知るには、昆虫そのものを見ることがまずたいせつである。しかし、ファーブルの昆虫記を読むことによって昆虫の生活はよりよくわかる。またわれわれは、すぐれた絵画や音楽や文学に接したときっと深い感動を受ける。3 しかし、これまでの人が、それらの絵や音楽や文学について書いた批評や解説を読めば、われわれの感動はより深まる。

本を読むことには、もっと別の利益がある。それは、いくらわれわれが苦労しても、自分自身では経験することのできない経験、それを教えられることである。

4 たとえば、ロビンソン・クルーソーのように、ただひとり離れ小島にただよい着いて、不便なひとりぼっちの生活を送るということは、おたがいの一生のうちに、まずありそうにもないことである。5 しかし、ロビンソン・クルーソー漂流記という書物を読めば、人間はそうした場合、どういう気持ちになり、どういう行動をするかということがわかる。6 また、孫悟空のように、雲に乗って空を飛びまわったり、耳の毛を何本かぬいて、ふっとふけば、それがみな自分と同じさるの形になって、そのへんを走りまわるというようなことは、空想の世界だけにあって現実の世界にはないことがらである。7 しかし、西遊記という書物を読めば、そうした場合に、人間はどんな気持ちになるだろうと、想像することができる。

小説ばかりではない。歴史の本も同じように役にたつ。われわれは、ジョージ・ワシントンのような地位に立つことは、まずあるまい。8 また、ナポレオンのような地位に立つことは、いっそうあるまい。しかし、ワシントンの伝記を読めば、誠実に世の中のためにつくそうとした人の喜びと苦しみがわかるし、ナポレオンの伝記を読めば、うぬぼれの過ぎた人間の得意さと悩みがよくわかる。

9 なるほど、われわれはロビンソン・クルーソーそのままの境涯になることはまずあるまい。つまり、離れ小島でひとりぼっちの生活を送ることは、まずあるまい。しかし、そうしたときの人間の気持ちを知っておくことは必要である。0

クルーソーは、不便きわまる境涯の中で、その不便にうち勝つために奮闘した。考えてみれば、われわれの住んでいる地球もたくさんの不便をもっている。これも大きな宇宙の中の一つの離れ小島であるかもしれない。クルーソーの離れ島は人間が少なすぎて困り、われわれもクルーソーと同じなのである。困ったあげく、ときどきは、あの雲に乗って飛びまわれたらと、ふと考えることがないでもない。その点では、われわれも孫悟空と同じである。しかし、それはむなしい空想だとさとると、やはりワシントンのように、じみちに誠実に生きようと思うし、ときにはまた、ふと、ナポレオンのように、からいばりをしたくなったりもする。つまり、ワシントンはわれわれの中にいるのであり、ナポレオンもわれわれの中にいるのである。ひとのことを読んでいるのではない。われわれのことを読んでいるのである。

書物を読むことにはこのような利益がある。ところでわたしが、これから書物を読もうという若い人たちに勧めたいことが一つある。それはこういうことである。気に入った書物にでくわしたときには、一度読んだだけでよしにせずに、二度三度とくり返して読んでほしい。二度三度とくり返して読みたくなる書物、それはきっとそれだけのよさをもった書物である。

孔子は、書物を読むことの利益を、初めて説き示した東洋人であるといってよい。ところで、孔子は易を読んで、韋編三絶したということが、その伝記に見えている。韋編というのは、皮のひもという意味であって、当時の書物は、竹の札を一枚ずつ横に並べ、札と札とを皮のひもでくくりあわせてあったが、そのひもが三度も絶ち切れるほど、易の書物を、孔子はくり返しくり返し読んだというのである。

われわれも、何かそれぞれに好きな書物を、とじ糸が三度も切れるほど愛読したいものである。どの書物がそれであるかは、人々によってちがうであろう。しかし、何かそうした愛読書を、一生のうちにはみつけたいものである。

課題 ヌルデ 11.2週
★これまでの人の観察や（感）
今週は感想文の課題です。
解説 11.2週

要約のヒント：次の質問にこたえるようなかたちで長文をまとめてみると要約になるよ(^o^)→（１）読書の利益を三つあげてみよう。（２）歴史上の人物のひとことを読むことはだれの気持ちを読んでいることになるのかな。（３）気に入った書物に出合ったらどうしてほしいと書いてあるかな。

解説：読書のおもしろさ、読書を通して学んだこと、韋編三絶（いへんさんぜつ）ほどではないが何度もくりかえし読んだ愛読書などが、似た話になりそうです。お母さんやお父さんに聞いてくると、さらにいい話が見つかると思います。ことわざは、若いうちにいい本をという意味で「鉄は熱いうちに打て」、書物から何かを教えられるという意味で「人の振り見てわが振り直せ」、読書だけではだめだという意味で「論語読みの論語知らず」などが使えると思います。「読書百遍意自（おのずか）ら通ず」なども知っているかな。

解説のつづき 11.2週

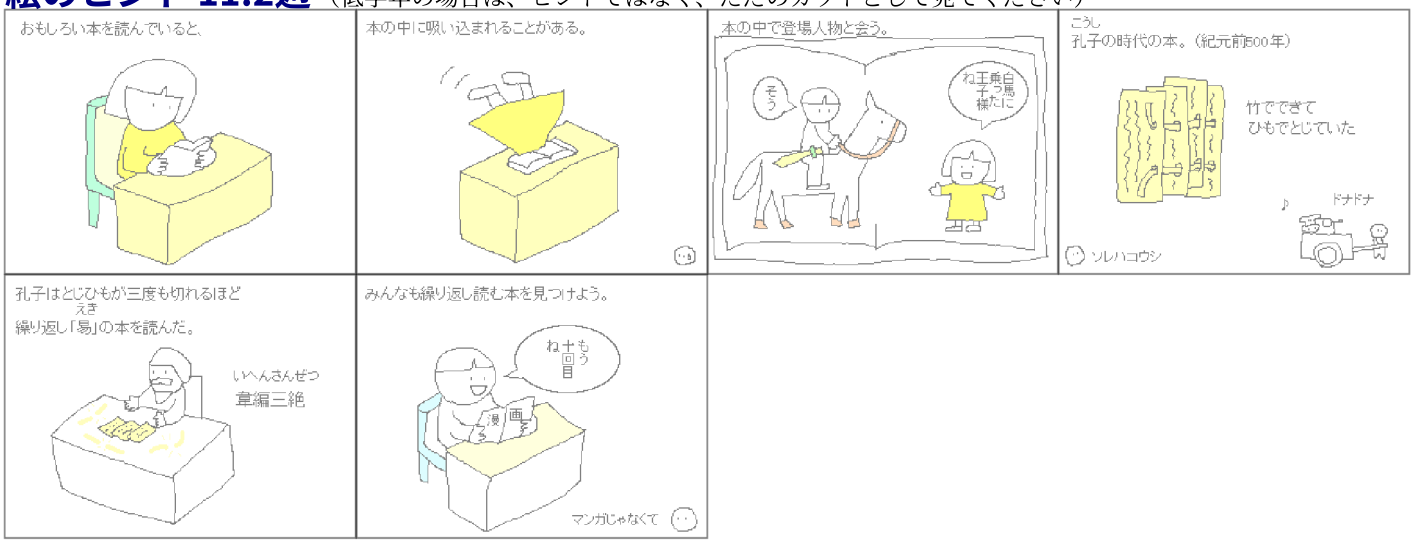
第一段落は要約です。長文の中から大事なところを三つか四つ選び、それらがうまくつながるように文を直して書いていきましょう。

第二段落は、似た例です。何度もくりかえし読んだ本の話、今でも心に残っている本の話など自分の読書体験について書いてみましょう。

第三段落も、似た例です。お父さんやお母さんに取材をしてみましょう。お父さんやお母さんが子供のころはどんな本が好きだったのかな？　友達の好きな本と自分の好きな本とを比べてみてもおもしろいかもしれません。また、自分が小さかったころのことを聞いて書いてもいいでしょう。夜寝るときには必ずお母さんが本を読んでくれたなどという話でもいいですね。小さいころはどんな本が好きだったか覚えていますか？

第四段落は、「わかった」ということばを使ってまとめます。「読書は人を成長させるということがわかった」、「読書の好みは人それぞれだということがわかった。」、「成長とともに好きな本も変わるということがわかった」など。

絵のヒント 11.2週（低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください）



★科学的態度（感）

長文 11.3週 nu

1 科学的態度などというと、たいへんむずかしいことのように思いがちである。しかし、日常の生活におけるちょっとした心がけ次第でこの態度を身につけることができるものである。では、どのようなことを科学的態度というのであろうか。

2 まず、ものをよく見るということである。よく見ることができれば、何かふに落ちないことがあったとき「はてな。」「変だな。」と思うことができる。これが、科学的態度への出発点なのである。

3 ところで、われわれは、いつでもものをよく見ているようであるが、実は案外よく見ていないのである。たとえば、タイはどんな色をしているかとたずねると、たいていの人は赤いと言う。はたしてそうであろうか。4 絵にかいたえびす様の持つタイは、確かに赤い。しかし、ほんとうのタイは、それとは異なった色をしている。むらさき色に近い色で、生きているときは、さらに緑がかっている。5 もし、それを見る機会がないとしても、さかな屋の店頭にあるタイなら見ることができるだろう。タイは赤いという習慣的な考えで赤いと思っているだけである。

自然界に実際にあるもの、実際に起こっている現象は、決して単純に判断できるものではない。6 習慣や常識にとらわれていたのでは正しくものを見ることはできない。だから、自分の目を見開いて、しっかりと自分の目でたしかめる態度が必要である。

7 それでは、ものをよく見て、「はてな。」と感じさえすれば、それでいいのであろうか。問題は、「はてな。」と感じたとき、それだけで終わらせるかどうかという点にある。そのとき、「どうしてだろう。」と思い、それについて考えてみるようにしなければいけない。8 その場合、自分の持っている知識で説明がつかないときにはその疑問とする点について、すぐ実験したり、調べたりしてみることである。

ところが、実験などというと敬遠されがちである。が、実験を生活に取り入れることは、興味深いことなのである。9 たとえば、土をほり起こしているうちに、スコップがみょうに重くなったりする。そこで、草をひとつかみちぎって、こびりついている土をこすり取ってみる。すると、軽くなる。

そこで、土がこびりつかないようにしたら仕事が楽だろうということに気づく。0 家に帰ってさびを取り、油を引いておく。翌日からスコップは軽くなるにちがいない。そんな簡単な実験でいいのである。

日常の生活では、これと似たようなことに出合う場合が多いものである。そんなとき、疑問をいだいたら、そのままにほうっておかないで、実験したり調べたりすることがたいせつである。

科学的態度とは、疑問を実験や調査によって解決しようとする態度である。これは、科学を研究する者にとって必要な心がけであるばかりでなく、人間たちだれしもが身につけておく必要のある生活態度であるといえよう。

課題 ヌルデ 11.3週
★科学的態度（感）

今週は感想文の課題です。

解説 11.3週

内容：科学的態度は、ものをよく見ることから始まる。タイは赤いと思われているが、よく見ると紫色に近い。ものをよく見て「はてな」と感じたら、すぐに実験したり、調べたりすることだ。科学的態度とは、疑問を実験や調査によって解決しようとする態度である。

鯛（たい）の色の話が出てきますが、先入観でものを見ずに自分の目でしっかり確かめるのが科学的態度の出発点だというような例をさがすといいと思います。日本では太陽の絵をかくとき赤で塗ることが多いと思いますが、欧米では黄色で塗ることが多いということです。しかし、実際の太陽を見てみると、赤でも黄色でもない、どちらかといえば白い色です。

また何かの実験をしたり調査をしたりしたことがあれば書いてみましょう。牛乳パックから葉書を作ったり、洗濯のりからスライムを作ったりと、いろいろしたことがあるでしょう。

ことわざは、実際に見てみることが大切だという意味で「百聞は一見にしかず」、疑問を持ったり考えたりすることが大切だという意味で「人間は一本の葦にすぎない。しかしそれは考える葦である」、本に頼らないで自分で実際に確かめることが必要だという意味で「論語読みの論語知らず」など。

解説のつづき 11.3週

第一段落は要約です。長文の中から大事なところを三つか四つ選び、それらがうまくつながるように文を直して書いていきましょう。

第二段落は、似た例です。よく観察したり、調べたり、実験したりしてみたら、自分が先入観でそのものを見ていたことに気づいたなどという話がぴったりです。先入観に関する話はこれまでに何度か書いたことがあると思いますが、そんな話をまた思い出して書いてみてもいいでしょう。

第三段落も、似た例です。エジソンやワットは、子供のころからいたずら好きで何でも自分で確かめてみなければ気がすまなかったようです。そのような話を聞いた話として書いてみましょう。

第四段落は、「わかった」ということばを使ってまとめます。自分の目で確かめたり調べたりすることの大切さということで考えてみましょう。

解説のつづき 11.3週

第三段落の、似た例→ミニヒント

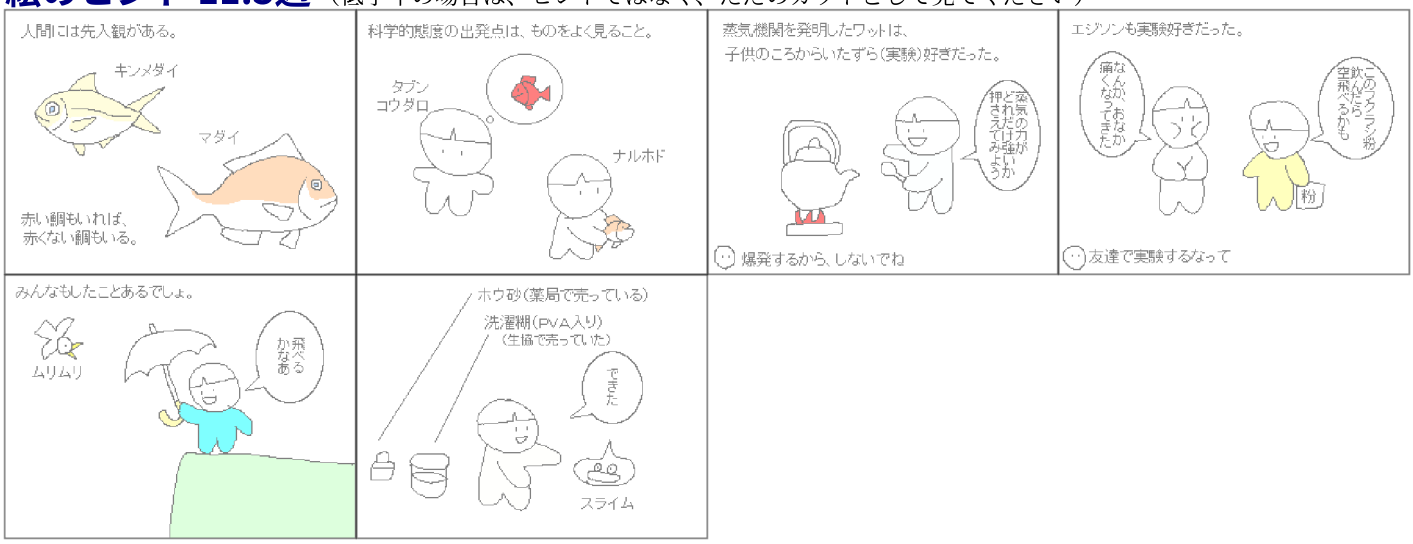
科学的態度で、実例が思い浮かばないときはお母さんや、おばあちゃんに、生活の知恵として聞いた話などを書くのもいいですね。

例えば、なすのぬか漬けをつくるとき、ぬか床にさび釘や焼きミョウバンを入れたりすると、色よく仕上がります。

卵をゆでるとき、塩をひとつまみ投げ入れておくと、殻がわれても、白身がお湯の中に逃げ出さない……等々、いわゆる、「おばあちゃんの知恵袋」のような昔から言い伝えられているアイデアの数々は、ちゃんとした、科学的根拠に基づいているのですね。

他にも、科学クラブなどで、カルメ焼きや、シャボン玉作りの実験をしたことなども、使えそうです。

絵のヒント 11.3週（低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください）



○初七日の終わった夜、

長文 11.4週 nu

初七日の終わった夜、私はふとんを抜け出し、母屋を出て離れにある弟の部屋に行った。電灯の紐をさがしていると高校生特有の、運動部の選手独特の汗のしみた匂いが漂った。

あかりをつけると、そこには受験勉強の最中だった弟の時間が停止したまま浮かび上がっていた。私は弟の机を掌で触れた。ひんやりとした木目の感触から、つい十数日前まで、ここで笑ったり、うたを歌ったり、悩んだりしていただろう若いゴツゴツした弟の気持ちのようなものが感じられた。

部屋を見回した。かつて私も使っていた本棚があった。『樽にのって二万キロ』『コンチキ号漂流記』『冒険者×××』、そんな本が並んでいた。小夜の話は本当であった。

してはならないと思ったが、私は弟の引き出しを開けてみた。大学ノートが一冊あった。それは弟が高校に入学してからの日誌で、毎日ではないが日々のこと、サッカーの練習、小遣いの出納も記してある雑記帳のようなものだった。真面目な弟の性格がよくあらわれていた。

二月のある日、そのページだけが文字がていねいに書いてあった。その日は弟の誕生日である。私が父と争って出ていった翌月だった。

要約すると、――兄が父と争って家にもどらないことになった。母に相談し父に命じられて、自分はこの家を継ぐことにした。医者になる。父は病院をたてると言った。だが自分はシュバイツァーのような医者になりたい。アフリカに行きたい。しかし親孝行が終わるまでがんばって、それからアフリカに行き冒険家になりたい。その時自分は四十歳だろうか、五十歳だろうか……。それでも自分はそれを実現するために、体を鍛えておくのだ。私は兄にずっとついてきた。兄が好きだ……――

弟はその冬、北海道大学の医学部志望を担任に提出したという。

私は自分の身勝手さ、いいかげんさを思った。済まないと思った。長男である私のわがままが、弟を泣かせ、孤独にしていた。

あの夏の午後、川向こうの屋敷町に私は弟と二人で蝉を捕りに行った。私達の町と違ってそこは塀の上にまで大きな木々が茂り、蝉は捕り放題にいる。たちまち弟の持つかごは蝉で一杯になった。

帰ろうとした時、屋敷町の子供達に囲まれた。蝉を置いて行けといわれた。四、五人の相手は身体も大きかった。弟は背後で私の上着を握りしめていた。私はだまっていた。すると背中で急に弟が大声で泣き出した。子供達は笑った。そして弟の持っていたかごから蝉をわしづかみにして、何匹かを道に投げつけた……。

家に帰ってから、私は弟をなじった。二度とおまえをどこにも連れて行かない、と言った。そういわれても弟は私のそばを離れないで、しゃくりあげながら私を見ていた。そんな弟によけい腹が立った私は、弟をなぐりつけた。弟はあやまりながら私を見つめていた。

ふとした時に、あの夏の日の弟の目を思い出し、日誌の文字が浮かぶ。あの少年達に立ち向かうこともしなかったひきょうな自分を思う。あやまることのできない自分が生きている。

蝉は壁にじっとしている。窓を開けたまま、私は電灯を消した。どこか他人とは思えぬ一匹と、自分を情けないと思っている一人が暗闇の中にいる。

もう秋がそこまで来ている。

（伊集院静「夜半の蝉」）

課題 ヌルデ 11.4週　★清書（せいしょ）

４週目は清書です。

ついにできたブリッジ

長文 12.1週 nu

1 天井と床がひっくり返って、天井が近づいてきた。一秒、二秒、三秒……、自分で数を数える。八秒。体の力が抜けた。またひっくり返って、今度は床が近づいた。同時に僕は思った。

「これで大丈夫だ。目標を達成したぞ！」

2 夏休みの課題の中で、僕の体にいちばん重くのしかかっていたのは「八木節に向けての体力作り」だった。

八木節とは、団体でやるダンスの演目だ。その中に、両手と両足を使って仰向けのまま体を持ち上げ、ブリッジをする場面があった。

3 僕は太っていて体が重いので、これは大変な作業だった。なにしろ、これまでやってきたブリッジでは一度も肩が上がらなかった。そのほかは確実にやりきる自信があったが、ブリッジは苦手だった。4 しかも、八木節は、運動会と三ツ沢競技場での発表会と、二回も踊らなくてはならない。不安は積もっていくばかりだった。

そんなわけで、僕は母にコツを教えてもらおうと思った。母は趣味でダンスをやっていたので、体の動かし方というのをよく知っていた。

5 母によると、重要なのは手のつき方だそうで、僕は正しいつき方をしていなかったらしい。だが、母に教わった手のつき方をしても、頭はまだ上がらない。なんとか頭をついたままのブリッジだけはできるようになったので、運動会では仕方なく頭つきでやった。6 成功したが、満足はできなかった。

僕は、三ツ沢競技場の発表会までに、なんとかブリッジを完璧にしたいと思った。頭つきだと、どうしても肩が下がり気味で、「へ」の字型のブリッジになってしまう。僕は、もっときれいにやりたかった。

7 練習あるのみと思った僕は、体育のときも頭をつかないブリッジにチャレンジしてみたが、やはり途中で倒れてしまうのだった。

僕は、学校から帰るときも、歩きながらどうしたらいいか考えた。

「できないわけはない。今度は手と足に全力を込めてやってみよう。」

8 こう前向きに考えたのがよかった。

家に帰ってカバンを置くと、さっそく考えたとおりにやってみた。仰向けに寝て、手を正しくつく。一度深呼吸をして、手足にぐっと力を入れ、一気に伸ばした。肩がまったく床から離れようとしてくれない。9 手に満身の力を込めた。それでも肩は上がらなかった。

「できないわけない。」

自分を励ましながら、必死に体を持ち上げた。だんだん天井が近づいてくる。そして、ついに肩が床から離れた感じがわかった。目標を達成できたのだ。

0 起き上がったとき、まるで世界そのものが自分の体とともに一回転して、がらりと変わったような気がした。

人間は、目標を達成することで大きな自信をつけることができる。だが、そのためには、その目標をどうしても達成しようとする意志の力が必要だ。「意志のあるところに道がある」。僕は、英語の先生に教わったことわざを思い出した。

（言葉の森長文作成委員会　ー）

課題 ヌルデ 12.1週
★おいしかったことまずかったこと
今週は題名だけの課題です。
解説 12.1週

最初に、自分の実際の体験でおいしかったことやまずかったことを書いていきましょう。題名課題のときは、書き出しの工夫をしてみるといいでしょう。作文の書き出しに、会話や色や音の様子を書いていきます。「『わあ、おいしそう。』ぼくの口から思わずよだれがたれた。」というような書き方です。

学校の給食でおいしいもの、まずいものを書いていってもいいでしょう。「舌がとろけるようなおいしさ」「天国に昇るようなおいしさ」「目が飛び出るようなまずさ」など、よく使われるたとえもありますが、できるだけ自分らしいたとえを使っていきましょう。

その次に、おいしかったことやまずかったことの話その２を書きます。自分の話でもいいのですが、できれば身近なお母さんやお父さんに取材してみましょう。お母さんやお父さんも、みんなと同じように給食でおいしかったものやまずかったものがあると思います。自分の思ったことを書くときは、「思った」という言葉を使わずに、いろいろな表現を工夫してみましょう。例えば、「あのお母さんがまずかったというだから、よほどまずいものだったのだろうと思った」と書くところは、「よほどまずいものだったに違いない」などと書いていきます。

最後は、わかったこと。「人によってずいぶん好き嫌いが違うのだと分かった。」「意外とみんなの苦手なものは似ていると分かった。」などという書き方です。できれば、結びに、書き出しの工夫で使った言葉を使ってまとめてみましょう。「思い出すと、今でも自然とよだれが出てくる。」

解説のつづき 12.1週

「書き出しの結び」をうまく決めるためには書き出しも工夫しておく必要があります。書き始めるときに、どんなふうに結ぼうか頭に思い浮かべることができるといいですね。

もちろん、書き出しに使った言葉を繰り返して結んでもよいのですが、書き出しと同じような言葉を使わずに、書き出しとうまく呼応する言葉を使って結ぶこともできます。たとえば、「いただきます。」で書き始め、「ごちそうさまでした。」などと結ぶのも一つのやり方です。

解説のつづき 12.1週

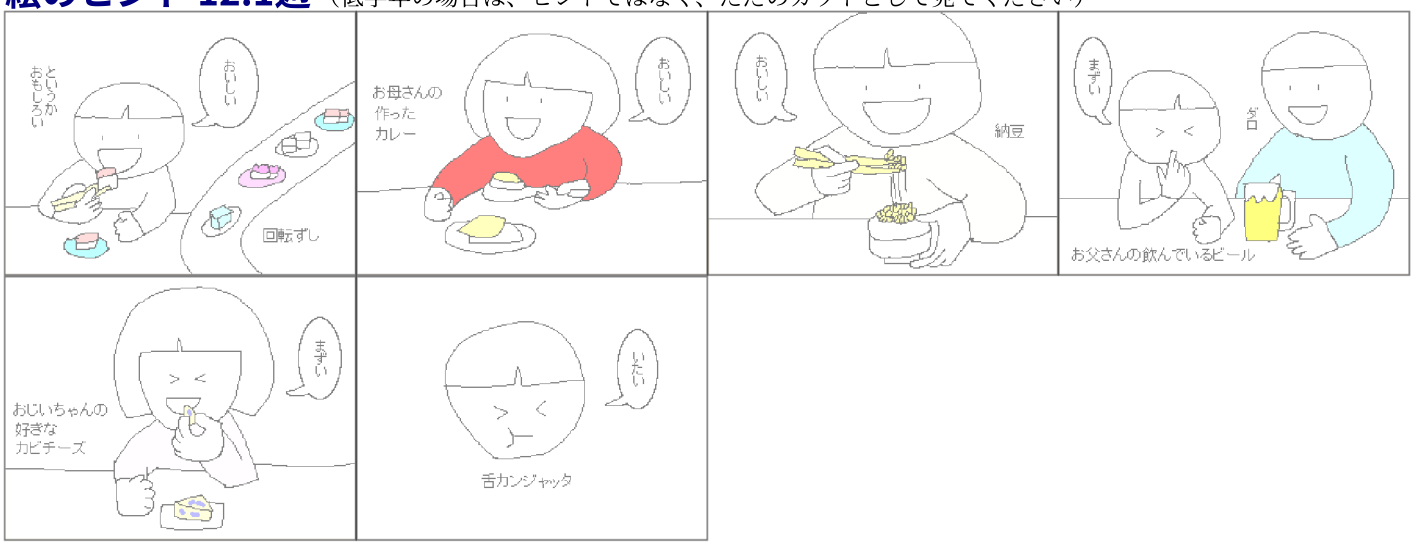
「おいしかったこと、まずかったこと」のことわざ引用例

お父さんがおいしそうに「くさや」という干物を食べながら、ビールを飲んでいたので、つられて一口たべてみたら、すごく変な味で、思わずはきだしそうになったような思い出があれば、使えそうですね。　→　「鵜（う）の真似をする烏（からす）、水に溺（おぼ）れる」

「これは、とても栄養があっておいしいから食べなさい」とお母さんに何度も言われたが、聞き流していたようなときに、使えそうです。　→　「馬の耳に念仏」

自分はまずいと思う食べ物だが、ほかの人たちが、とてもおいしいといって食べるもの、または、この反対に、自分は大好きでも、友人はまずいといって口にしない食べ物について書くとき使えそうなことわざです。　→　「蓼（たで）食う虫も好きずき」

絵のヒント 12.1週（低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください）



★ある日、五つになる（感）

長文 12.2週 nu

1 ある日、五つになる孫坊主からはがきがとどきました。文面は、「おようふく、ありがとう。そう」とただそれだけでしたが、この大小さまざまな十幾字かが、思い思いの方角をむいて、はがきからあふれ出そうに書かれていました。

2 これは、誕生日のお祝いの洋服の礼状なのです。「そう」というのは、草一郎の「草」で、「草、そう」と呼ばれているところからこう書いたものと思われます。わたしは、それがうれしくてうれしくて、長いこと自分の書斎に画びょうでとめておいたものです。3 ところで、考えてみると、手紙というものは、そうやさしいものではありません。どこがむずかしいかと申しますと、結局、手紙にはあて名があるからだと、わたしは思っています。もっとも、あて名のない手紙もあります。4 印刷されたあいさつじょうや通知じょうの類がそれです。わたしたちは、この砂をかむようなあて名のない手紙もずいぶん読まされます。

この事務的な手紙の印刷をわたしたちもすることがあります。年賀じょうなどはもっともよい例でしょう。5 これなどは、あて名のない手紙の代表的なものかもしれません。いま、この年賀じょうの余白に万年筆でほんの一行、「灘から例のが届いている。待っている」と書き添えたとしましょうか。6 このふぬけなはがきが、たちまちにして生き生きと血が通いだすのがわかりましょう。つまりは、この一行で、あて名が書かれたからのことです。これはしかし、あて名と同時に差出人があるということでもあります。7 受け取る側からすれば、差出人のない手紙などは一向にありがたくありません。歌や俳句の世界で、作者不在などとよく申しますが、手紙にもずいぶん筆者不在のものを見かけます。8 商用文でも、客筋にあてたものばかりでなく、商店から商店に出すものにも、それなりの筆者もあて名もあるべきだとわたしは思っています。

今日の文章のおおかたは、印刷されるものとして書かれるとみてよいでしょう。9 ところが、印刷されないということが前提で書かれる文章があります。日記と手紙です。この日記と手紙を比べてみると、大分ちがったところがあります。一つ二つひろってみると、日記は自分以外の人には見せないたてまえで書かれるのに、手紙は相手に見せることがたてまえで書かれます。0 日記の方は、どんな

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

文章で書いても自分の心覚えですから一向にさしつかえありませんが、手紙の方はそうはまいりません。もっと困ることは、日記の方は自分の手元に残っていて、いつどのようにでも処理できるのに、手紙の方は、相手に渡してしまわねばなりません。そして、相手がこれをどのように読もうと、自分はそれに関与できないことです。それどころではありません。いつまでも保存されて、わたしの「そう」のはがきのように壁にはられて、毎日毎日ながめられるような仕儀にもなりかねません。（中略）

手紙の妙味の真骨頂は、一対一で認められるところにあります。あて名があって差出人があることです。ユーゴーが、のちの「レ・ミゼラブル」の売れゆきを心配して出版社に「？」と書いてやったところ、おりかえし「！」と返事がきたという有名なお話があります。本屋の返事の「！」は、すごく売れていますという意味です。以心伝心、不立文字を地でゆくようなやりとりではありませんか。

わたしはこんな返事の書ける、こんな手紙がほしい。

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

課題 ヌルデ 12.2週
★ある日、五つになる（感）
今週は感想文の課題です。
解説 12.2週

解説：きれいに印刷された体裁がよいだけのものよりも、心のこもった手紙の方に価値がある、という話です。よく出てくる例で、年賀状。会社などから来る年賀状はカラーできれいに印刷されていますが、もらっても別にうれしくもなんともありません。義理で出していることがわかるからです。しかし、友達から来た年賀状は、鉛筆書きでときどき字をまちがえていたりしても、もらったときにうれしい気持ちがわいてくるでしょう。そういう例を思い出して書いてみましょう。感想は、「手紙とは……」というかたちで考えてみましょう。

ことわざは、「山高きが故に貴からず」「人生意気に感ず」など。外見よりも中身という意味のことわざはほかにもありそうですね。

解説のつづき 12.2週

第一段落は要約です。長文の中から大事なところを三つか四つ選び、それらがうまくつながるように文を直して書いていきましょう。

第二段落は、似た例です。ちょうど年賀状の準備をする季節ですね。これまでにもらった年賀状で印象に残っているのはどんなものでしょうか。手書きの年賀状と印刷された年賀状、どちらがもらってうれしいかな？

第三段落も、似た例です。毎日届く手紙はほとんどが印刷されたＤＭなどでしょう。そんな中に手書きの葉書などが交ざっているとなぜかほっとしますよね。お父さんやお母さんがもらってうれしい手紙とはどんな手紙か取材してみるのもよいでしょう。

第四段落は、「わかった」ということばを使ってまとめます。手紙に限らず、外見がきれいに整っていることよりも心がこもっていることの方が大切ですね。

絵のヒント 12.2週（低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください）

★数年前のことに（感）

長文 12.3週 nu

1 数年前のことになるが、私は米国人の言語学者T氏と東京で親しくなった。彼はもともとアメリカ・インディアンの言語を専門に研究していたが、終戦後の日本に軍人として駐留していたこともあって、最近では日本語の歴史や方言にも興味を示しはじめ、遂に奥さんと三人の娘をつれて東京にやって来たのである。2 奥さんはイタリア系の人で、小学校の先生をしている。

彼は古い日本家屋を一軒借り、畳に座蒲団、冬は炬燵に懐炉、そして三人の娘を日本の学校に入れるという、一家あげての見事な日本式生活への適応ぶりだった。

3 ある日、アメリカの学者の習慣として、彼は多くの言語学関係の友人、知人を家に招待した。まずイタリア風のイカのおつまみなどで、カクテルを済ませた後、別室で夕飯ということになった。4 一同が座につくと、テーブルには肉料理やサラダなどが並べられ、面白いことに、白い御飯が日本のドンブリに盛りつけて出されたのである。

5 畳の上に座っていること、白い御飯であること、T氏たちが日本式生活を実行していることなどが重なり合って、一瞬私は、この御飯を主食にして、おかずを併せて食べるのだという風に思ったらしい。6 目の前の肉の皿を取り上げて、隣の人に回そうとしかけた時、私はT夫人のかすかにとまどったような気配を感じた。

間違ったかなと思った私は、御飯は肉と一緒に食べるのか、それとも御飯だけで食べるのかと尋ねると、夫人は笑いながら、まず御飯を食べて下さいと言う。

7 私はその時、はっと気が付いた。この御飯は、イタリア料理ではマカロニやスパゲッティと同じくスープに相当する部分なのだと。

はたして、それは油と香辛料で料理した、一種のピラフのようなものだった。

8 食事というものは、いろいろな条件に制約された文化という構造体の重要な部分である。何をいつ食べるか、それをどう食べるか、食べていけないものは何か、といったことに関して、どの国の食事にも、さまざまな制限や規則が習慣として存在する。

9 カトリック教徒は金曜日には獣肉を食べないし、イスラム教徒は豚肉を不浄なものとして決して食べないというようなことは誰でも知っている有名な事実であろう。

0 しかしこのように、何かを食べてはいけないという明示的な規則は、外国人にも比較的判りやすい。ところが自分の国の食物と同じものが、外国の食事の中にありながら、その食物と他の食物との関係が、自国の食事の場合と違うという、つまり同一の食物の食事全体における価値が、文化によって異なるときに、難しい問題がおきるのである。

白い米の御飯は、日本食の場合には、食事の始めから終わりまで食べられる。というよりは、米の飯だけを集中的に食べることは、むしろいけないこととされている。おかずから御飯、御飯からお汁と、あちこち飛び回らなければ、行儀が良いとは言えないのである。

そこで米の飯と他の食物との日本食における関係は、並列的・同時的であると言えよう。お汁に始まり、香の物に至るまで、米を食べてよいのである。

ところが、食事の一段階ごとに一品ずつの食物を片付けていく、通時的展開方式の性格の強い食事文化もある。西洋諸国ではこの傾向が強く、イタリアの食事も例外ではない。ここでは麺類や米の料理などは、ミネストラと称して、本格的な肉料理が始まる前に済ませてしまうのだ。

私がドンブリに盛られた白い御飯を見て、おかずも一緒に食べようと思った失敗は、日本の食事文化に存在するある項目を、別の

長文 12.3週 nuのつづき

食事文化の中に見出したため、これを自分の文化に内在する構造に従って位置づけ、日本的な価値を与えようとしたことが原因なのであった。

文化の単位をなしている個々の項目（事物や行動）というものは、一つ一つが、他の項目から独立した、それ自体で完結した存在ではなく、他のさまざまな項目との間で、一種の引張り合い、押し合いの対立をしながら、相対的に価値が決まっていくものなのである。

自分の文化にある文化項目（たとえばある種の食物）が、他の文化の中に見出されたからといって、直ちにそれを同じものだと考えることが誤りなのは、その項目に価値（意味）を与える全体の構造が、多くの場合違っているからである。

（中略）

私たちが、外国語を学習する際にも、いま述べたような具合に、自国語の構造を自分ではそれと気づかずに、まず対象に投影して理解するという方法をとりやすい。従っていろいろと食い違いが生じてくるのも当然である。

（鈴木孝夫『ことばと文化』による）

99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67

課題 ヌルデ 12.3週
★数年前のことに（感）

今週は感想文の課題です。

解説 12.3週

内容：何をいつ食べるか、それをどう食べるか、といったことに関して、どの国の食事にも、さまざまな制限や規則が習慣として存在する。日本食の場合には、米の飯と他の食物との関係は、並列的・同時的である。ところが、食事の一段階ごとに一品ずつの食物を片付けていく、通時的展開方式の性格の強い食事文化もある。日本の食事文化に存在するある項目を、別の食事文化の中に見出すと、これを自分の文化に内在する構造 に従って位置づけてしまうことがある。

解説：「ことばと文化」は岩波新書で出ています。著者の鈴木孝夫さんは日本語に関する独創的な思想や提案を述べていますので、将来、機会があればぜひ読んでください。

和食のレストランと洋食のレストランでは、料理の出され方がちがいます。和食ではまとめてどさっと空間的（並列的・同時的）に料理が出てきますが、洋食では最初はスープ、次はパン、次はギョウザで、最後はラーメン（おいおい、それは洋食じゃないって）という具合に時間的（通時的）に料理が出てきます。

社会の勉強の好きな人なら、インドでは牛肉のすき焼きなど食べられないということや、イスラム圏では豚肉の焼き肉パーティーなどできないということを知っているでしょう。

日本人のよく使う「すみません」や「はい」は軽いあいづちのようなものですが、これをそのまま英語で「エクスキューズミー」や「イエス」とひんぱんにやってしまうとかえって誤解されてしまうことがあります。

文化の違いによって、同じ事柄が異なった価値のもとに位置づけられてしまうという例をさがしてみましょう。日曜日にお父さんやお母さんと話し合ってみるといいかもしれませんね。

解説のつづき 12.3週

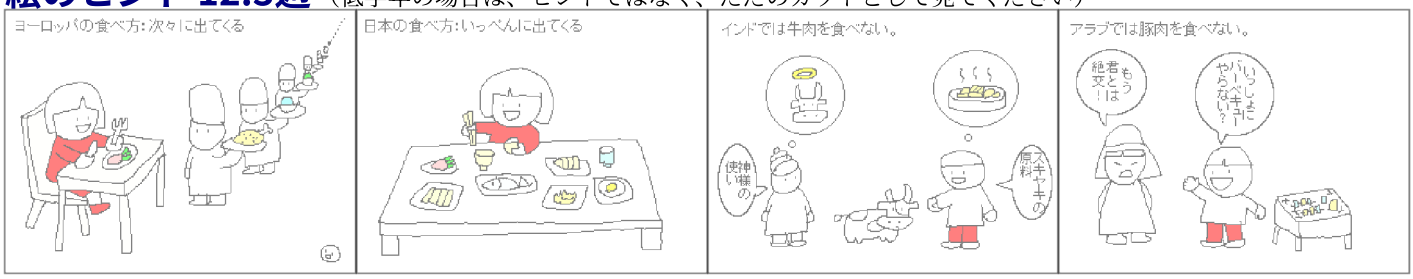
第一段落は要約です。長文の中から大事なところを三つか四つ選び、それらがうまくつながるように文を直して書いていきましょう。

第二段落は、国によって食事文化が違うという例を挙げます。和食と洋食とでは食べ方もずいぶん違います。文化の違いということで、食事以外の話を書いていってもいいでしょう。例えば、「私は、この前テレビを見ていて、サソリの空揚げを食べている国があったので、驚きました。」など。

第三段落も、似た例です。国によって文化や習慣が違うという話を聞いたり、調べたりして書いてみましょう。国によって食べてはいけないものもあるようです。また、あいさつの仕方などにも違いがあります。そんな話をお父さんやお母さんに聞いてみましょう。

第四段落は、「わかった」ということばを使ってまとめます。国によって文化や習慣の違いがあることをお互いに理解し合っていくことが大切ですね。

絵のヒント 12.3週（低学年の場合は、ヒントではなく、ただのカットとして見てください）



○いちばん運動会らしいのは、

長文 12.4週 nu

いちばん運動会らしいのは、やはり、かけっこ。このごろは五十メートル競走、八十メートル競走と呼ばれる。六人が一組になって走る。一着から三着までが、それぞれの旗のところへ並ぶ。こういうのは五十年前にわれわれもやったのと同じだからなつかしさもひとしおである。

来賓席はテントの中にある。かけっこのコースは反対側になるから、スタートからゴールまでが一望の中におさまる。ピストルがなると、小さな足が目もとまらぬ速さで前後する。目がチクチクする。どういう応援をしたらよいのかわからないから、手もちぶさたにながめているより手がない。

そのうちに、おもしろいことに気がついて、急に力を入れて見るようになる。というのは、スタートとゴールで、順位が大きく変わるということだ。

スタートで出おくれたこどもが、三、四十メートルのところから頭角をあらわし、六、七十メートルではトップに立ち、そのままゴールへ入る。そういう組がいくつもいくつも出てくる。はじめは偶然かと思っていたが、どうもそうではなさそうである。たいていの組で大なり小なりそういう傾向がみとめられる。スタートからずっとトップで通すというのは例外である。

途中で伸びてきた子がよい成績をあげる。もし、スタート地点から十メートルくらいのところで優劣をきめれば、ゴールでトップになる子はおそらくおくれた方に入ってしまうに違いない。早いところで、ゴールの順位を占うことがいかに危険であるか、これらのかけっこは、これでもか、これでもかと見せていた。こどもたちにはかけっこの教訓を汲みとることはできまいが、先生たるものは見逃す手はない。

傍におられる温厚な校長先生に

「かけっこだけではなく、勉強にも、これと似たことがおこっているのではありませんか」と言ったら、校長先生も深く肯かれた。

こどもはどこで力を出すかわからない。スタートの近くで、ああだ、こうだと言ってみてもしかたがない。

小学校のかけっこはせいぜい百メートル競走である。それでも出おくれた子が途中からぐんぐん出てくる。ゴールへトップで入った子がいちばん早いのは、百メートルまでのことであるのも忘れてはならない。ゴールが二百メートルにのびれば、あるいは、ちがう子が出てきてトップに立つかもしらぬ。さらに四百メートル、千五百メートルならまた別のこどもが出てくる。

人生は七十年余り走りつづける超大マラソンである。学校教育はそのはじめのうちの二十年くらいにしかかわらない。そこで、この生徒は優秀、とか、劣等だとかきめつけてしまうのは、百メートル競走なのに、スタートから三十メートルくらいのところの順位でものを言っていることになる。

その運動会のかけっこを見ていても、本当のレースは半分くらいを走ったところから始まるのがわかる。学校の先生は、この点について、用心の上にも用心をしたい。めいめいのペースというものがある。百メートルではビリでも五千メートルならトップに立つということはある。学校ではいっこうにパッとしなかったのが、世の中へ出て、二十年、三十年すると、目ざましい快走を見せているという例はいくらでもある。

目先はいけない。重ねて言うが、教育は長い目を要する。

（外山滋比古「空気の教育」）

課題 ヌルデ 12.4週　★清書（せいしょ）

４週目は清書です。

ことわざ集印刷版 => ウェブ版 => 詳細版

詳細はホームページの詳細版をごらんください。

1	**悪貨は良貨を駆逐（くちく）する**　質の悪い人間がはびこって、優れた人間が姿を消すということ。……
2	**悪銭（あくせん）身につかず**　不正な手段で得た金は、つまらないことに使ってしまうからすぐなくなる。
3	**悪法も法である（ソクラテス）**
4	**新しいブドウ酒は新しい皮袋に**　新しい考えや新しい内容は、新しい形式で表現することが必要である。
5	**雨降って地固まる**　一度ごたごたのあったあとに、かえってよくまとまる。
6	**蟻（あり）の穴から堤（つつみ）がくずれる**　堅固な堤も、蟻のあける小さな穴がもとでこわれる。……
7	**案ずるより産むが易（やす）し**　心配するよりもやってみると、意外にやさしい。
8	**石の上にも三年**　冷たい石の上にも三年すわり続ければ暖まる。つらくてもがまんして続ければ、……
9	**石橋をたたいて渡る**　非常に用心深く、十分に確かめてから物事をなすたとえ。念には念を入れること。……
10	**医者の不養生（ふようじょう）**　医者は、人には養生を勧めながら、自分は案外不養生なものである。……
11	**衣食足りて礼節を知る**　生活が豊かになって、礼儀にも気を配るようになる。
12	**急がば回れ**　急ぐときには危険な近道を通るよりも、遠くても安全な道を回るほうが、……
13	**一事が万事**　一つのことの様子を見れば、ほかのこともわかる。
14	**一年の計は元旦にあり**　何事も初めが肝心だ、しっかり計画を立て、着実に実行せよとの戒め
15	**一国の政治は、その国の国民の民度を出ない（ウェーバー）**
16	**一寸（いっすん）の虫にも五分（ごぶ）の魂**　どんなに小さく弱い者にも、それ相応の意地がある。……
17	**井の中の蛙（かわず）大海を知らず**　自分の周りの、ごく限られた範囲のことしか考えない、……
18	**入るを量りて出ずるを制す**　収入の額をよく計算して、それに応じた支出をすること。
19	**鰯（いわし）の頭も信心（しんじん）から**　信じて拝めば、鰯の頭のようにつまらないものでも……
20	**氏（うじ）より育ち**　人の価値は、血統よりも環境や教育や努力によるところが大きい。
21	**嘘（うそ）も方便（ほうべん）**　物事を円満に運ぶための手段として、時と場合によっては嘘も……
22	**鵜（う）の真似をする烏（からす）、水に溺（おぼ）れる**　自分の能力を考えずに人の真似をすると失敗する。
23	**馬の耳に念仏**　馬が念仏など聞いても少しもありがたく感じない。……
24	**生みの親より育ての親**　生んでくれた親よりも養い育ててくれた親の方に愛情や恩義を感じるものである。
25	**瓜（うり）のつるになすびはならぬ**　平凡な親からは非凡な子供は生まれない。……
26	**蝦（えび）で鯛を釣る**　わずかな元手で大きな利益を得る。
27	**岡目八目（おかめはちもく）**　部外者のほうがよくわかる。
28	**屋上（おくじょう）屋（おく）を架す**　重複して無用なことをする。
29	**おごれる者久しからず（平家物語）**　栄華を極め、勝手な振る舞いをするものは、長くその地位を……
30	**渇（かっ）しても盗泉（とうせん）の水を飲まず**　どんなに困窮しても悪いことはしないたとえ。
31	**勝ってかぶとの緒をしめよ**　戦いに勝っても勝ちにおごって気を許さずに心を引き締めよということ。
32	**勝てば官軍**　強い方が正しいとされ、弱い方が悪いとされるのが世のならわしである。
33	**蟹（かに）は甲羅（こうら）に似せて穴を掘る**　人は、自分の分に応じた行動をするものだ。……
34	**果報は寝て待て**　あせらずに待っていれば、幸運は自然とやって来る。
35	**亀の甲より年の功**　年長者の経験は尊重しなければならない。
36	**かわいい子には旅をさせよ**　かわいい子には苦労の多い旅をさせて、世の中の苦しみやつらさを……
37	**艱難（かんなん）汝（なんじ）を玉にす**　人間は苦労を経験して初めて立派な人物になることができる。
38	**学問に王道はない**　学問というものには、手軽に身につける特別な近道はない。
39	**聞くは一時の恥聞かぬは末代（まつだい）の恥**　知らないことは恥ずかしがらないで必ず聞きただせという意。
40	**窮（きゅう）すれば通ず**　困り切ると解決の道が開ける。
41	**窮鼠（きゅうそ）猫をかむ**　追い詰められたねずみは、反対に猫にかみつく。……
42	**麒麟（きりん）も老いては駑馬（どば）に劣る**　優れた人でも老衰すると……
43	**腐っても鯛**　たとえ腐っても鯛は魚の王である。……

44	**君子（くんし）は和して同ぜず、小人（しょうじん）は同じて和せず（論語）**　人のつきあいは、……
45	**鶏口（けいこう）となるも牛後（ぎゅうご）となるなかれ**　大きな団体でしりについているよりも、……
46	**怪我の功名（こうみょう）**　失敗が思いがけずよい結果につながること。
47	**剣によって立つ者は剣によって滅ぶ**　武力で得たものは、武力によって滅ぼされる。
48	**光陰（こういん）矢のごとし**　歳月のたつのは早いものだというたとえ。
49	**後悔先に立たず**　事が終わってから、そのことについて悔やんでも取り返しがつかない。
50	**恒産（こうさん）なければ恒心なし（孟子）**　物質生活は人心に大きな影響を及ぼすもの……
51	**弘法（こうぼう）も筆の誤り**　学問や技芸が非常にすぐれた人でも時には誤ることもある。
52	**虎穴に入らずんば虎児を得ず**　危険を冒さなければ成功は収められない。
53	**郷（ごう）に入（い）っては郷に従え**　人は、住んでいる土地の風習に従うのがよい。……
54	**塞翁（さいおう）が馬（幸不幸は入れかわる）**　人生の禍福、幸不幸は、変転して定まりないものである……
55	**災害は忘れたころにやってくる（寺田寅彦）**　油断大敵。
56	**歳月人を待たず**　年月の流れは非常に速くて人を待ってくれないから、今という時を大切にして努力せよ……
57	**最大多数の最大幸福が道徳と法律の基礎である（ベンサム）**　個人の快楽の追及を社会の幸福と一致させる……
58	**先んずればすなわち人を制す**　人より先に物事を行えば他人を押さえて有利になるが、遅れると……
59	**去るものは日々に疎（うと）し**　死んでしまった人は、日数がたつにつれて世間からしだいに……
60	**三度目の正直**　一回目や、二回目はだめでも、三回目は、確かであるということ。
61	**三人寄れば文殊（もんじゅ）の知恵**　平凡な人間でも三人寄り集まって考えれば……
62	**鹿を逐（お）うものは山を見ず**　一つのことに夢中になっている者は、ほかのことを顧みない。……
63	**知って行わざるは、知らざるに同じ**　知っていることも、実行に移さなければ、知らないのと同じことに……
64	**宗教は国民の阿片（あへん）である（マルクス）**
65	**朱に交われば赤くなる**　人はつきあう友によって、善にも悪にも感化される。……
66	**小人（しょうじん）閑居（かんきょ）して不善（ふぜん）をなす（大学）**　暇があると、……
67	**小の虫を殺して大の虫を生かす**　大きい物事を成就させるためには、やむをえず小さい物事を犠牲に……
68	**将を射んとする者はまず馬を射よ**　目的物を得るためには、その周囲にあるものから攻めてかかるのが……
69	**初心忘るべからず（花伝書）**　学び始めた頃の、謙虚で緊張した気持ちを失うなの意。……
70	**児孫（じそん）のために美田（びでん）を買わず（西郷隆盛）**　良い田を買って子孫のために財産を残しても……
71	**人間（じんかん・にんげん）到るところ青山（せいざん）あり**　故郷だけが骨を埋める土地とは限らない。……
72	**人生意気に感ず**　人生は互いの意気に感じて動くものである。……
73	**好きこそ物のじょうず**　素質とかよい指導者とか、大成するにはいろいろな条件が考えられるが、……
74	**過ぎたるは及ばざるがごとし**　やりすぎは、不足と同じ。
75	**捨てる神あれば拾う神あり**　見捨てられる一方で助けられることもある。……
76	**住めば都**　住み慣れれば、どんな土地でも都同然に住み心地がよくなるものである。
77	**精神一到何事か成らざらん**　精神を集中して努力すればどんな困難なことでもできないことはない。
78	**清濁（せいだく）あわせ呑む**　度量が大きく、分け隔てしないで誰でも受け入れる。……
79	**急（せ）いては事を仕損じる**　あまり焦ると失敗しやすい。……
80	**積善（せきぜん）の家には余慶（よけい）あり**　よいことをしている家にはよいことがおこる。
81	**世間の口に戸は立てられぬ**　世の中のうわさは防ぎようがない。
82	**狭き門より入れ。滅びに至る門は大きくその道は広くこれより入る者は多し**　事をなすのに楽な方法を……
83	**栴檀（せんだん）は双葉より芳（かんば）し**　栴檀という香木は、芽ばえたときから既によい香気を……
84	**船頭多くして船山にのぼる**　物事を進めるにあたって、指示をする人が多いために統一がとれず、……
85	**前車のくつがえるは後車の戒（いまし）め**　前人の失敗は後人の戒めとなる。
86	**大器晩成**　大人物は若いころは目立たず、年をとってから大成するという意味。
87	**大木は風に折られる**　高くのびた木は風当たりが強く、風害を受けることが多い。……
88	**多芸は無芸**　多芸の人は、とくにすぐれた芸がない。
89	**立つ鳥あとを濁さず**　鳥のようなものでも、飛び立つときは自分の去ったあとを濁さないように……

90	**蓼（たで）食う虫も好きずき**　苦い蓼の葉を食べる虫がいるように、人の好みはさまざまで、……
91	**玉（たま）みがかざれば器（き）をなさず**　どんなによい玉でも、加工して磨いて始めて宝の器物となる。……
92	**大は小を兼ねる**　大きいものは小さいものの効用を合わせ持つ。……
93	**血は水よりも濃い**　血縁の力は強い。
94	**朝三暮四（ちょうさんぼし）**　目先の違いはあるが本質はかわっていない。……
95	**長所は短所**　長所もあまり当てにしすぎると、かえって失敗することがある。……
96	**塵（ちり）も積もれば山となる**　ごくわずかなものでもたくさん積み重なるとついには高大なものとなる。……
97	**使っている鍬（くわ）は光る**　たえず努力して自分の仕事に打ち込んでいる人は、生き生きとして美しい……
98	**角（つの）を矯（た）めて牛を殺す**　少しの欠点を直そうとして、かえってそのものをだめにしてしまう……
99	**罪を憎んで人を憎まず**　犯した罪を憎むが、その人は憎まない。……
100	**鉄は熱いうちに打て**　人間は純真な精神を失わないうちに十分に鍛えないと効果が上がらない。……
101	**天の時は地の利にしかず、地の利は人の和にしかず（孟子）**　日の吉凶や寒暑・晴雨など、天候や時日を……
102	**天は自ら助くる者を助く**　独立独歩、他人を当てにせず、自ら奮闘努力してやまない人には自然に……
103	**出る杭（くい）は打たれる**　ほかの杭より高く出た杭は打ちへこまされる。……
104	**燈台（とうだい）下暗し**　手近のことはかえってわからず、気がつかないでいるという意味。……
105	**十で神童、十五で才子、二十過ぎればただの人**　小さいときは教え込めば何でも覚えるが、……
106	**毒をもって毒を制す**　悪いことを別の悪いことで押さえる。
107	**情けは人のためならず**　人に情けをかければいつかは自分のためにもなる。
108	**なまけ者の節句働き**　平素なまけている者に限って、ほかの人が仕事を休んで祝う節句の日になって、……
109	**生兵法（なまびょうほう）は怪我（けが）のもと**　未熟な兵学・武術の心得は、身を守るどころか……
110	**習い性となる（習慣は第二の天性）**　悪い習慣を繰り返していると、それが生まれつきの性格のようになる。
111	**習うより慣れよ**　教わり習っただけでは自分のものにならないが、何度もやって体が慣れれば自然に……
112	**逃がした魚は大きい**　手に入らなかったものは大きく感じられる。……
113	**二兎をおう者は一兎も得ず**　同時に異なった二つのことをしようとがんばっても、どちらもうまくいかない……
114	**人間は一本の葦（あし）にすぎない。だが、それは考える葦である（パスカル）**
115	**能ある鷹は爪をかくす**　実力、才能のある人物は、むやみにそれを外部に表さず謙虚にしているが、……
116	**のどもとすぎれば熱さ忘れる**　苦しい経験も、それが過ぎ去ればけろりと忘れてしまう。……
117	**花よりだんご**　外観より内容をとるという意味。
118	**早起きは三文の得（徳）**　朝早く起きると何かしらよいことがあるものである。……
119	**人の振り見てわが振り直せ**　人の行動の良い点悪い点を見て、自分の行動を反省し、欠点を改めよ。
120	**人を相手にせず、天を相手にせよ**
121	**人を呪わば穴二つ**　他人に害を与えようとすれば自分にも。
122	**百聞は一見にしかず**　人の話を何度も聞くよりも、一度実際に自分の目で見た方がよいという意味。
123	**百里（千里）の道も一歩から**　遠い旅路も足もとの第一歩から始まる。……
124	**貧（ひん）すれば鈍（どん）する**　貧乏すると、利口な人でも愚かになる。……
125	**覆水（ふくすい）盆に返らず（過ぎたことは取り返せない）**　一度失敗したことはとり返しがつかないたとえ。
126	**太ったブタになるよりは、やせたソクラテスになれ**
127	**下手の考え休むに似たり**　よい考えも出ない人がどんなに時間をかけて考えても、ただ時間をかけるだけで……
128	**仏の顔も三度**　いかに無邪気な人、慈悲深い人でも、礼儀知らずな行いを繰り返されれば腹を立てる。……
129	**まかぬ種ははえぬ**　何もしないでいては、よい報いは得られない。……
130	**馬子（まご）にも衣裳**　身なりだけ整っていることを、皮肉に、または好意的にいうことば。……
131	**自ら省（かえり）みて直（なお）くんば、千万人といえども我行かん（孟子）**　自分が正しいと思ったら……
132	**水清ければ魚住まず**　あまりに清廉潔癖（せいれんけっぺき）すぎると、人に親しまれないたとえ。
133	**三子（みつご）の魂（たましい）百まで**　持って生まれた性質は一生変わらない。……
134	**実るほど頭（こうべ）をたれる稲穂かな**　年をとっていろんな知識を得ても人にはいつも低い姿勢で……
135	**餅（もち）は餅屋蛇（じゃ）の道はへび**　物にはそれぞれの専門家があって、素人はやはり専門家には……

136	**安物買いの銭（ぜに）失い**　安い物はそれだけ粗悪で長持ちしないから、かえって高いものにつくという意味。
137	**柳に雪折れなし**　柔軟なものは剛直なものよりもかえってよく事に耐えることができる。……
138	**やはり野におけ蓮華草（れんげそう）**　蓮華草のような野の花は、自然の野に咲いているからこそ……
139	**山高きが故に貴からず**　見かけが立派だからといって貴いのではない。
140	**雄弁は銀、沈黙は金**　上手によどみなく話すことは大切であるが、いつ、どのように沈黙……
141	**楽あれば苦あり（苦あれば楽あり）**　人生には、楽しいこともあれば、また、苦しいこともあり、一概には……
142	**李下（りか）に冠をたださず（瓜田（かでん）に履（くつ）をいれず**　他人から疑いを受けやすい行為は……
143	**良薬は口に苦し**　良い薬は苦くて飲みにくいが、病気にはよく効く。……
144	**類は友を呼ぶ**　同じ仲間同士が自然に集まるようになる。……
145	**例外のない規則はない**　どんな規則にも必ず例外がある。……
146	**論語読みの論語知らず**　書物を読んで、言葉の上では理解するが、その真髄を体得せず、まして実行など……
147	**ローマは一日にしてならず**　すべて大きな事業は、長い年月を必要とする。……
148	**禍（わざわい）を転じて福となす**　災難をうまく処置して、かえって幸福を得るようにすること。

暗唱長文 ５級 の１頁　　雨ニモマケズ／小諸なる古城のほとり

1 雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ
慾ハナク
決シテ瞋ラズ
イツモシヅカニワラッテヰル
一日ニ玄米四合ト
味噌ト少シノ野菜ヲタベ
アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ
ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ
2 野原ノ松ノ林ノ蔭の
小サナ萱ブキノ小屋ニヰテ
東ニ病気ノコドモアレバ
行ッテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ
行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ
南ニ死ニサウナ人アレバ
行ッテコハガラナクテモイヽトイヒ
北ニケンクヮヤソショウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイヒ
3 ヒデリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サウイフモノニ
ワタシハナリタイ
（「雨ニモマケズ」　宮沢賢治）

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

4 小諸なる古城のほとり　雲白く遊子悲しむ
緑なすはこべは萌えず　若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡辺　日に溶けて淡雪流る
5 あたゝかき光はあれど　野に満つる香も知らず
浅くのみ春は霞みて　麦の色わづかに青し
旅人の群はいくつか　畠中の道を急ぎぬ
6 暮行けば浅間も見えず　歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の　岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて　草枕しばし慰む
（「小諸なる古城のほとり」　島崎藤村）
7 昨日またかくてありけり　今日もまたかくてありなむ
この命なにを齷齪　明日をのみ思ひわづらふ
8 いくたびか栄枯の夢の　消え残る谷に下りて
河波のいざよふ見れば　砂まじり水巻き帰る
9 嗚呼古城なにをか語り　岸の波なにをか答ふ
過し世を静かに思へ　百年もきのふのごとし
千曲川柳霞みて　春浅く水流れたり
たゞひとり岩をめぐりて　この岸に愁を繋ぐ 0
（「千曲川旅情の歌」　島崎藤村）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

●暗唱の手順　１日分

・１日目は、まず、1の文章を３０回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。
　正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。
　イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。
　お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。
　１５回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ３０回続けて読んでください。
　なぜ回数を決めて繰り返すかというと、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。
　３０回音読しても暗唱できない場合は、もう１０回音読してください。
　これでその1の文章が暗唱できるようになります。
　それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

　暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。
　そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順　１週間分

・１日目に、1の文章を暗唱できるようにします。
・２日目は、2の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・３日目は、3の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・４日めは、1、2、3の全部通して、１０回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
・５日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。
・６日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。
・７日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。すると、1から3の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順　１か月分

・１週目に、1から3の文章を暗唱できるようにします。
・２週目は、もう1から3はやらずに、今度は4から6の文章を暗唱します。
・３週目は、同じように、7から9の文章を暗唱します。
・４週目は、1から9の文章を全部通して、毎日４回ずつ音読します。
・すると、１か月で1から9の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の１部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●より詳しい説明は

　より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」（https://www.mori7.com/mori/mori/annsyou.html）をごらんください。

▼課題フォルダ

（１）課題集○○の山

★印がその週の課題です。★印が二つある場合はどちらを選んでもかまいません。

課題集は、授業のはじまる前までに見ておき、何を書くか決めておきましょう。

小学１、２年生は自由な題名が中心です。小学３、４年生は、決められた題名が中心です。感想文の課題の場合は、その週の長文を読んでから先生の説明を聞くようにしましょう。小学５、６年生の課題は、難しいものが多いので、よく読んで似た話を見つけておきましょう。

言葉の森のホームページにある「生徒ページ」のリンクから、「鳥の村」に入れます。「鳥の村」の「資料室」には、学年別課題の解説などが載っているので参考にしてください。

https://www.mori7.com/tori/

（２）項目表○○の苗

課題集の次のページに項目表があります。

項目表の★印の項目ができるように作文を書いていきましょう。★印の項目が十分にできる人は、◎印の項目もできるようにしていきましょう。

項目ができたところに、項目の説明又は項目のマークを書きましょう。清書のときは、項目の説明やマークは書きません。

（構成 題材 表現 主題 ）

（　項目マークの絵は、枝、葉、花、実がわかるように自由にかいてかまいません。）

（３）課題フォルダの中身

課題フォルダには、週ごとの課題と解説と長文が載っています。その週の課題を見て、書くことを準備しておいてください。

・課題フォルダの長文は、毎日の音読に使ってください。感想文の課題のときの、もとになる長文も兼ねています。

●言葉の森 233-0015 横浜市港南区日限山4-4-9 電話 045-353-9061